

かみ の ぼう い せき
上 の 坊 遺 跡

2002. 8

長野県飯田市教育委員会

かみ の ぼう い せき
上 の 坊 遺 跡

2002. 8

長野県飯田市教育委員会

序

私たちの飯田市は環境文化都市一人の営みと自然が調和し、文化の質が高く、交流もさかんで、いきいきと豊かな暮らしができるまちをめざしています。市民の心のよりどころ風越山とはるかに望む中央アルプス・南アルプスの山々、豊穣をもたらす天竜川、名水百選に選ばれた猿巻の泉など、豊かな自然に恵まれています。わけてもここ竜丘地区上川路地籍は、春にギフチョウが舞い、清流久米川で山女魚やカジカが泳ぐ、のどかな田園風景がひろがるところです。また、県史跡御猿堂古墳・馬背塚古墳をはじめとする古墳群、中世には信濃国守護の小笠原氏が帰依した古刹開善寺など多くの文化財に恵まれた、飯田下伊那地方の古来からの政経の中心地です。そして、地区のみなさんと行政が一体となってこうした恵まれた自然や文物を大切にし後世に伝えていこうとして、ギフチョウの保護や塚原古墳群の保存に取り組んでいます。

ところで、飯田市内では既に20年ほど前から事業所等が中心市街地から郊外に移転し始め、一般国道153号飯田バイパスの開通に伴いその流れは加速しつつあります。今回の発掘調査に関わります事務所兼倉庫移転もこうした時流に沿ったもので、工事は地域の産業・経済振興の面でやむを得ないものがありました。そこで、次善の策として工事前に発掘調査を実施し、記録保存することになりました。

この発掘調査では、今から5,000年ほど前の縄文時代の人々が生活していたムラの跡や、馬背塚古墳の周囲に築かれた古墳時代のお墓の跡、そして古代寺院があったことを推測させる瓦などが調査されたと聞いております。古墳築造に統いて寺院建立がなされるなど、古代飯田下伊那の政経の一中心地であったことは間違いないありません。

この度、発掘調査から10年を経てようやく本報告書を刊行する運びとなりました。この間の多くの開発に伴い加わった発掘調査により多くの新しい知見が蓄積された一方で、今回の調査成果は長く市民の皆さんに公表されず眠っていたわけで、その活用はようやくスタート地点に立ったということになります。

この10年間に調査地点周辺は天竜川治水対策事業などによって大きな変貌を遂げ、洪水により私たちの生命や財産がおびやかされる危険性は少くなり、生活はより豊かなものになっていくと思われます。一方でこうした事業と引き換えに自然の原形や数々の文化財を失っていく現実を直視しなければならず、地道に、一刻も早く調査報告書を刊行する努力が求められます。

最後になりましたが、本調査書が広く有効利用されることを願うと共に、名糖乳業株式会社ならびに発掘調査に多大なご理解とご協力を賜りました皆さまに深甚なる感謝を捧げまして、発刊の辞といたします。

平成14年8月

飯田市教育委員会

教育長 富田泰啓

例　　言

1. 本書は名糖乳業株式会社の事務所・倉庫建設に先立って実施された、長野県飯田市上川路310-1上の坊遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、名糖乳業株式会社の委託を受け、飯田市教育委員会が直営実施した。
3. 調査は、平成3年度に現地作業、平成13・14年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号としてKKBに地番310-1を付してKKB310-1を一貫して用いた。
5. 本書の記載順は遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。
6. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行った。
7. 本書の執筆と編集は馬場が行った。
8. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
9. 本書に掲載した石器実測図の表現は『恒川遺跡群』（飯田市教委 1986）に準拠した。なお、節理面は斜線で示した。
10. 本書に関連した出土遺物及び図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館に保管している。

本文目次

序

例言

目次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 歴史環境	5
第Ⅲ章 調査結果	11
第1節 調査区の設定	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	11
(1) 方形周溝墓	11
(2) 竪穴	17
(3) 土坑	17
(4) 溝址	21
(5) 溝状址	23
(6) 周辺柱穴	23
(7) 遺構外出土遺物	23
第Ⅳ章 総括	24
引用参考文献	28
報告書抄録	47

挿図目次

挿図 1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	4
挿図 2 調査地点周辺地形図	8
挿図 3 調査区の設定	9
挿図 4 遺構全体図	10
挿図 5 方形周溝墓 1、竪穴 1・2	12
挿図 6 方形周溝墓 2～4、溝址 7	13
挿図 7 方形周溝墓 5	15・16

挿図 8	土坑 1 ~ 16	18
挿図 9	土坑 17 ~ 32	19
挿図 10	溝址 1 ~ 6 + 8	20
挿図 11	溝址 9 + 10、溝状址 1、周辺柱穴平面図	22

図 版 目 次

第 1 図	方形周溝墓 5、土坑 1 + 3 + 6 ~ 8	32
第 2 図	土坑 9 + 11 + 16 + 19 ~ 22	33
第 3 図	溝址 2 + 4 + 6、遺構外出土遺物	34
第 4 図	遺構外出土遺物、方形周溝墓 5、土坑 3 + 7 + 9 + 20 + 22、溝址 2	35
第 5 図	溝址 2 + 4 + 6 + 9、遺構外出土遺物	36
第 6 図	遺構外出土遺物	37
第 7 図	遺構外出土遺物	38
第 8 図	遺構外出土遺物	39
第 9 図	方形周溝墓 2 + 5、土坑 9 + 19 + 21、溝址 2、遺構外出土遺物	40

表 目 次

第 1 表	遺構属性表	30
-------	-------	----

写 真 図 版 目 次

図版 1	調査区全景	41
図版 2	方形周溝墓 1 方形周溝墓 2 他 方形周溝墓 5	42
図版 3	方形周溝墓 5 確認出狀況 同断面	43
図版 4	土坑 2 + 3 + 7 土坑 15 溝址 3 + 5、土坑 14	44
図版 5	南西側トレンチ 南東側トレンチ 重機作業風景	45
図版 6	遺構検出作業 遺構掘り下げ作業 方形周溝墓 5 確認出作業	46

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成3年6月3日、飯田市鼎上茶屋3272番地 名糖乳業株式会社 代表取締役 塚平利九郎より開発に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協議依頼書が提出された。そこで、飯田市教育委員会では長野県教育委員会文化課担当職員の派遣を申請し、関係者立会の下、同7月6日現地協議を実施した。

当該地は、埋蔵文化財包蔵地上の坊遺跡の一画にあたり、長野県史跡馬背塚古墳と近接するほか、付近には多数の小円墳が存在する。また、南側約100mには布目瓦が出土する上川路廃寺があり、本小字も僧坊の別院に由来するといった伝承もある地点である。

協議の結果、とりあえず全面にわたって試掘調査を実施し、その結果に基づいて改めて協議することとなった。

協議に基づいて、同8月5日重機により試掘調査を実施した。建物部分を中心にコの字状に3本のトレンチを設定し、幅1.5m、深さ約50cmを掘削した。その結果、周溝墓の周溝と考えられる平行する2本の溝址を含む多数の溝址や、縄文時代前期の遺物が多出し、本発掘調査が必要と判断された。

第2節 調査の経過

試掘結果に基づいて再度協議し、本発掘調査を実施することとなった。8月5～8日、事務所・倉庫部分全面にわたって重機により表土を除去し、8月23日作業員を入れて本調査に着手した。人力により遺構検出を行い、確認された遺構について順次掘り下げ精査した。これらについて写真撮影・測量調査を実施し、9月17日現地作業を終了した。引き続いて、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理、出土遺物の水洗・注記作業等を平成4年3月末まで実施した。

平成13・14年度は、飯田市考古資料館において、遺物実測・拓本とり、遺構図等の作成・トレース作業、版組み等を行い、本報告書作成作業にあたった。

第3節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 福島 稔（～平成3年12月）

小林恭之助（平成3年12月～11年12月）

畠田 泰啓（平成11年12月～）

調査担当者 馬場保之・佐合英治

調査員 佐々木嘉和・吉川 豊・渋谷恵美子・吉川金利・伊藤尚志・下平博行・坂井勇雄

羽生俊郎

作 楽 員 市瀬長年・小沢英一・金子裕子・木下 傳・木下玲子・小平不二子・斎藤徳子

塩沢澄子・高橋収二郎・滝上正一・塙原次郎・丹羽由美・細田七郎・牧内 修

森 信子・吉沢まつ美

新井ゆり子・池田幸子・伊東裕子・伊原恵子・大藏祥子・金井照子・唐沢古千代

唐沢さかえ・川上みはる・木下早苗・櫛原勝子・小池千津子・小平まなみ・小林千枝

佐々木真奈美・渋谷千恵子・佐藤知代子・関島真由美・高木純子・竹本常子

橋 千賀子・田中 薫・田中恵子・筒井千恵子・中沢温子・中田 恵・中平けい子

中村地香子・萩原弘枝・林勢紀子・林 ひとみ・原 昭子・原沢あゆみ・橋本宣子

平栗陽子・福沢育子・福沢幸子・牧内喜久子・牧内とし子・牧内八代・松下博子

松本恭子・三浦厚子・南井規子・宮内真理子・森藤美知子・森山律子・吉川悦子

吉川紀美子・若林志満子

(2) 事務局

飯田市教育委員会

1) 平成3年度

吉河省治 (教育次長)

安野 節 (社会教育課長)

中井洋一 (" 文化係長)

小林正春 (" 文化係)

吉川 豊 (" ")

馬場保之 (" ")

篠田 恵 (" ")

渋谷恵美子 (" ")

2) 平成13・14年度

久保田裕久 (教育次長)

中島 修 (生涯学習課長)

小林正春 (生涯学習課文化財保護係長)

馬場保之 (生涯学習課文化財保護係)

渋谷恵美子 (" ")

吉川金利 (" ")

伊藤尚志 (" ")

下平博行 (" " 、平成13年度)

坂井勇雄 (" ")

羽生俊郎 (" ")

宮田和久 (学校教育課総務係)

福沢恵子 (" " 、平成13年度)

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市竜丘地区は、飯田市街地から南に約4～8kmに位置し、飯田市全域から見ればやや南部にあたる。東は天竜川をはさみ龍江地区に、北は毛賀沢川で松尾地区と境を接する。南は久米川をはさみ川路地区となり、西は高位段丘上で伊賀良地区と接する。

伊那谷の基本的な地形は、天竜川の流れに沿ったほぼ南北方向への断層段丘地形を特徴としている。伊那盆地ができはじめたのは250万年位前からで、天竜川が流れ始めたのもこの頃からといわれる。この頃から60万年前までに南アルプスが隆起をはじめ、竜東側に巨大扇状地ができ、60万年前頃から中央アルプスが隆起をはじめ、伊那谷全体が巨大扇状地で埋め尽くされた。そして、10万年前頃から断層運動が活発となり、中央アルプスの上昇とともに盆地全体も上昇し、断層がたくさんできた。また、山地の上昇と気候の温暖化により、天竜川やその支流により段丘および扇状地の開析が進行した。伊那谷の生い立ちを知る上で、最も参考になるのが松尾から竜丘地区を貫く「念通寺断層」である。

竜丘地区では天竜川が東端を南流し、大部分が鷲流峡の狭窄部にあたり、その先時又付近からは流れをやや西側に変えて、広々とした氾濫原を形成する。平坦部は、氾濫原を含め大きく5～6の段丘面で形成されており、それらは火山灰が被らない低位段丘Ⅱと被る低位段丘Ⅰとに大別できる。下位の面が沈降した結果、段丘崖直下には湿地が形成される場合が多い。また、伊賀良と接する中位段丘の標高は500m前後で、ローム層に覆われた台地である。低位段丘Ⅰとの比高差は約70mを測り、その境が「念通寺断層」である。各段丘面は毛賀沢川・新川・西沢川・駒沢川・臼井川・久米川といった天竜川の支流により開析され、複雑な小地形を呈している。

気候面でみれば、飯田市は比較的温かく、平均気温は、13℃を越え、降水量は年間1,600mm程度と年間を通して周辺の山地部より少ない。竜丘地区は飯田市の中でもさらに温かく、これは、地区的大部分が標高370～440mと低いことが主因であり、また、西側に大きな段丘崖を背負っているため、冬の南西からの卓越風から守られる格好になっていることも要因のひとつにあげられる。こうした温かく気候や起伏に富んだ地形に由来して、飯田市をはじめとして下伊那地域は豊かな動植物相を示している。植物の水平分布からみると暖地性と温帯性の分布の接点にあたり、植物の種類も2,500種に及ぶ植生豊かな地域である。また、飯田市から阿智村・下条村・泰阜村に分布するギフチョウは、市内では竜丘・伊賀良・川路・三穂・龍江・千代の各地区に生息しており、平成元年1月31日付で飯田市指定文化財（天然記念物）に指定されたほか、同年4月には地区内桐林のギフチョウ公園が環境庁の「ふるさといきもの里」に指定されている。

上の坊遺跡は、地区内南端部、久米川に面した低位段丘Ⅱの、1段上位の段丘面上に位置している。



1. 開善寺境内遺跡
2. 塚原古墳群（二子塚・3号・鏡塚他）
3. 小池遺跡
4. 前の原遺跡
5. 内山遺跡
6. 久保尻遺跡
7. 安宅遺跡
8. 宮城遺跡
9. 駄科北平遺跡
10. 鈴岡城跡
11. 前林庵寺
12. 蒜田遺跡・蒜田古墳
13. 上の坊遺跡・馬背塚古墳
14. 御駒堂古墳
15. 久保田遺跡・正清寺古墳
16. 龍江城遺跡
17. 毛賀御射山遺跡

插図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

第2節 歴史環境（挿図1）

竜丘地区の遺跡を概観すると、天竜川氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全域が包蔵地であり、殊に、飯田下伊那地方で最も古墳が多く築造されている。竜丘地区での遺跡発掘調査は近年（主に昭和40年代以降）になって増大してきた。これまでに、鏡塚古墳（飯田市教委 1967）、内山・花の木遺跡（同 1968）、大島・安宅遺跡（飯田建設事務所 1969、以上一般国道151号付替えに先立つ調査）、鈴岡城址（飯田市教委 1990a）、安宅遺跡（同 1995a、以上県道駄科大瀬木線拡幅改良に先立つ調査）、小池・宮城・神送塚古墳（同 1974a）、前の原遺跡（同 1975）、駄科北平遺跡（同 1976、以上農業構造改善事業に先立つ調査）、前の原遺跡（同 1990b、市立竜丘保育園建設）、蒜田古墳、塚原遺跡・塚原二子塚古墳・ガンドウ洞遺跡（同 1991a、以上治水対策事業運搬道路建設に先立つ調査）、開善寺境内遺跡（同 1974b-考古資料館建設、同 1991b-集会所建設、同 2001-市道建設、同 2002a-県道改良）、安宅遺跡、蒜田遺跡、ガンドウ洞遺跡、鈴岡城址、西の塚遺跡、久保尻遺跡（同 1996a）、内山遺跡（同 1998a、以上民間開発に先立つ調査）等各緊急発掘調査、および宮洞窯址群の学術的な調査や飯田高校考古学クラブによる前の原遺跡調査が行われている。

竜丘地区の歴史を概観すれば、縄文時代より古く遡る遺跡はこれまでに確認されていない。しかし、火山灰が確認される低位段丘I（いわゆる「桐林面」・「駄科面」・「長野原面」等）や中位段丘上では、他地区の上溝遺跡・八幡原遺跡・猿小場遺跡（松尾地区）や下の原遺跡（伊賀良地区）等で旧石器時代の遺物が出土しており、地区内にもこの時代の遺跡がある可能性は高い。

縄文時代は開善寺境内遺跡で断片的ながらも草創期～早期の遺物出土がある。前期になると、隣の川路地区の今洞遺跡・月の木遺跡・川路大明神原遺跡で住居址等が調査されており、氾濫原から20m程の高所で集落が営まれるようになる。中期には宮城遺跡・前の原遺跡・安宅遺跡・駄科北平遺跡で竪穴住居址等が調査されており、宮城遺跡では飯田地方では数少ない藤内II式期を主とする集落が調査されている。駄科北平遺跡では中期後半の住居址が2軒調査され、さらに終末のものと考えられる石棒を伴う配石墓壙がある。また、開善寺境内遺跡において中期中葉～後葉の遺物が出土している。後期初頭として、宮城遺跡土坑出土の東海地方の影響を受けた土器が注目される。後・晩期から弥生時代中期にかけては、具体的に生活の様子を物語る資料はほとんどない。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は、他地域の状況と同様遺跡数が増加しており、これまで中・高位段丘上での調査事例が主である。安宅遺跡・蒜田遺跡・ガンドウ洞遺跡・鈴岡城跡で住居址が調査されている。開善寺境内遺跡や川路地区や竜東対岸の龍江地区では、治水対策事業に先立つ調査で氾濫原に面した緩斜面で集落の一部が調査されており、今後低位段丘での調査例も増えると考えられる。また、蒜田遺跡では、貼り石をもつ方形周溝基が調査されている。蒜田遺跡は方墳と考えられる蒜田古墳に近接した位置にあり、古墳時代の地域的な墓制の特徴を解明する上で、注目される遺跡といえる。

竜丘地区には消滅したものを含めると140基の古墳が築造されており、松尾・座光寺地区とともに古墳が集中する地域である。飯田市は前方後方墳・前方後円墳および帆立貝型古墳の数が多いことで際立っており、特に地区内には塚越・権現堂・兼清塚・丸山・大塚・塚原二子塚・金山二子塚・馬背塚・御猿堂といった前方後円墳、それから塚原3号・鏡塚・鎧塚の帆立貝型古墳がある。かつて飯田下伊那地方の古墳は横穴式石室に特徴があるといわれていたが、近年では5世紀代築造と考えられる権現堂・兼清

塚・丸山・大塚・塚原二子塚・塚原3号・鏡塚・鎧塚各古墳があり、横穴式石室に先行して堅穴式石室やそれに類する埋葬施設を持つ古墳があると考えられている。そして、当地方の5・6世紀の古墳築造の動向は、畿内における大和政権の大古墳築造の動きと通じることが指摘されており、古墳出土の馬具や殉葬馬と絡めて、当地区が馬匹生産で重要な役割を果たしたといわれている。なお、長野県史跡の御猿堂古墳からは重要文化財の画文蒂四仏四獸鏡が出土したと伝えられている。

古墳時代後期の集落址は、安宅遺跡・前の原遺跡・ガンドウ洞遺跡・開善寺境内遺跡等わずかな調査例がある。前述の古墳築造の背景として、相当規模の集落が複数あったと考えられ、例えば、開善寺境内遺跡は御猿堂古墳・馬背塚古墳等の築造に携わったと考えられている。また、前の原遺跡では、一辺が11mを測る大規模な堅穴住居址が調査されており、出土遺物から居住のための施設と考えられるものの、他と懸隔した居住者の性格を物語るものと考えられる。

古墳時代末から奈良時代にかけて地区内桐林に古瓦・瓦塔破片を出土した前林廃寺（大沢 1961）、上川路に多量の古瓦を出土する上川路廃寺があったことが知られており、さらに宮洞窯址からは埴仏が出土している（遂那 1966）。本遺跡に隣接する上川路廃寺でも、開善寺西境内の工事中に多量の古瓦が発見されており、軒丸瓦・鶴尾・丸瓦・平瓦等の出土がみられ、古代寺院の存在が推定されている。今次調査地点周辺の「上の坊」という地名もこれと関連すると考えられる。また、松尾地区の毛賀御射山遺跡（飯田市教委 1978）でも平安時代の布目瓦や瓦片が出土しており、古墳築造に引き続いて新たな権力の象徴として寺院の建立がなされ、当地区が重要な位置を占め続けていたことが窺われる。

安宅遺跡や前の原遺跡では、これまでに奈良・平安時代の集落址の一画が調査されている。前の原遺跡の場合、時期および性格の把握が困難であったが、9×2間の身舎に3面廂を持つ総柱建物址と、これに接して2列に並んだ柱列址が検出されている。古墳時代以降、竜丘地区が飯田下伊那地域の主要な位置を占めていたことをさらに裏付けるものといえる。また、高位段丘の縁の駒沢川に面した部分では、良質な粘土と湧水に恵まれ、陽当たりの良い緩斜面を利用して宮洞・河内洞・堤洞といった須恵器生産の窯址群が集中している。

古代東山道の経路については異論があるが、推定伊那郡衙とされてきた座光寺地区の恒川遺跡で、ようやく奈良時代の正倉と考えられる建物址が確認された。また、松尾地区の久井遺跡でも大規模な掘り方を持つ2棟の掘立柱建物址が調査されており（同 1993a）、古代官衙址に関連した何らかの建物の存在が予想されている。安宅遺跡では官衙ないし寺院の可能性をもつ大型の掘立柱建物址・柱列址があり、かつ灰釉陶器碗の転用窯が出土している。また、駄科北平遺跡では、平成元年度に実施した詳細分布調査に際して、平安時代の円面窯が表探されている。官衙的遺跡・遺物の存在は、竜丘・松尾・座光寺を東山道が通過していたことを強く示唆するといえる。

平安時代の末期には、文書に伊賀良庄の名が登場し、地区内の一部が伊賀良庄に含まれている。鎌倉時代末には鎌倉・京都で禅宗が流行したことを承けて、名刹開善寺が開かれた。寺伝により建武2(1335)年領主小笠原貞宗が京都建仁寺より清拙正澄を招請して創建されたとも、また、貞和2(1346)年7月19日の三浦和田文書によれば、地頭江馬氏が寺領として中村・河路両郷を寄進し大鑑清拙を開山として禅刹開善寺を創建したともいわれる。暦応元(1338)年室町幕府から諸山に、応永34(1427)年十刹に列せられたが、明応8(1499)年に火災に遭い山門を除いて焼失し、衰微した。その後、天文18(1549)年、小笠原信貴が武田信玄の援助を受けて京都妙心寺より速伝を招き復興したが、天正10(1582)年織田信長

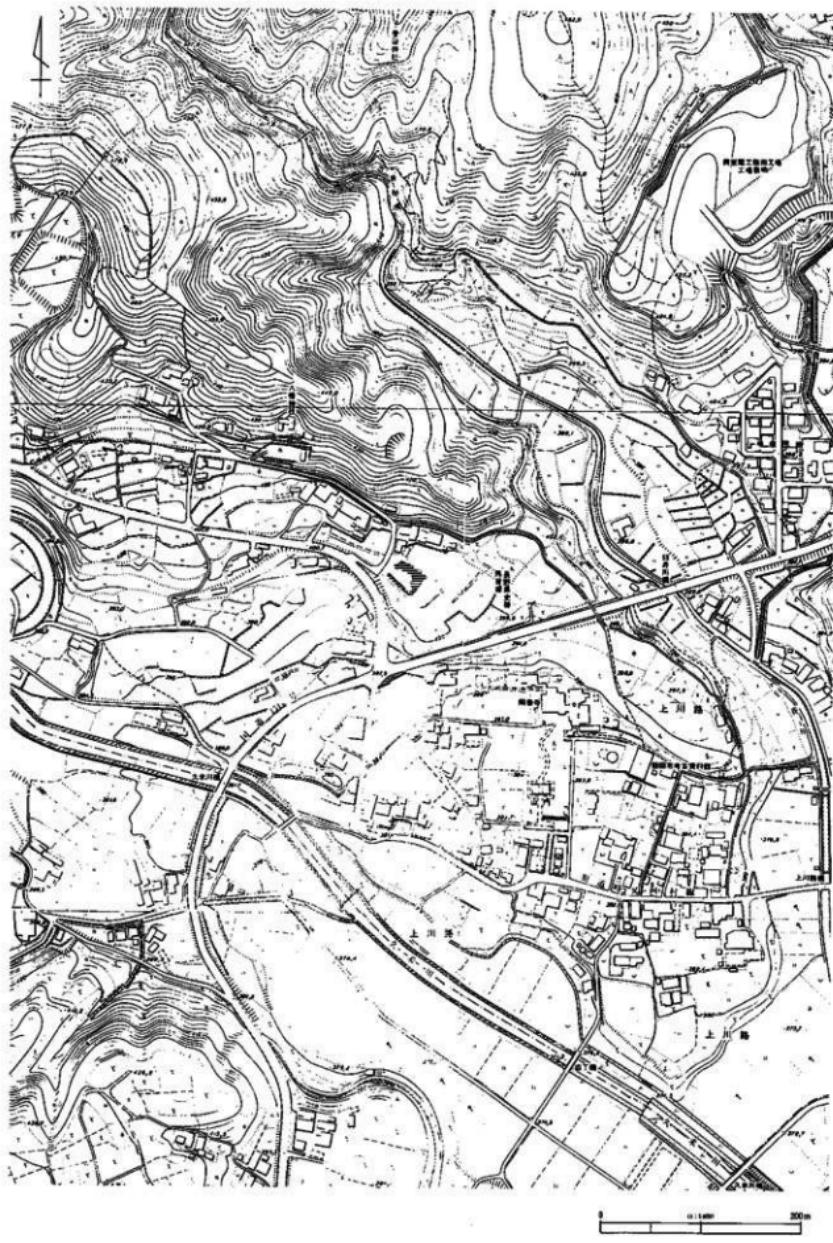
の信濃侵攻に際し兵火を受け、元禄11(1698)年頃にはば現在の寺觀に復している。山門は重要文化財、鐘楼は国認定重要美術品となっている。この時期の考古学的な成果は少ないが、昭和48年に飯田市考古資料館建設に先立ち実施した発掘調査では、開善寺旧伽藍の一画にあたると考えられる中世の堂宇が確認されている。

南北朝期には、地区の北端毛賀沢川に面して、小笠原貞宗の次子宗政により鈴岡城が築城され、対岸の松尾城とともに小笠原一族の居城であった。しかし、信濃國守護職を松尾小笠原と争い急速に勢力が衰え、天正10(1582)年織田信長の信濃侵攻により滅亡した。駄科北平遺跡では中世堂址と考えられる遺構や四耳壺・青磁・山茶碗・内耳土器・和鏡等遺物が調査されており、鈴岡小笠原氏と深い関わりがあると考えられる。

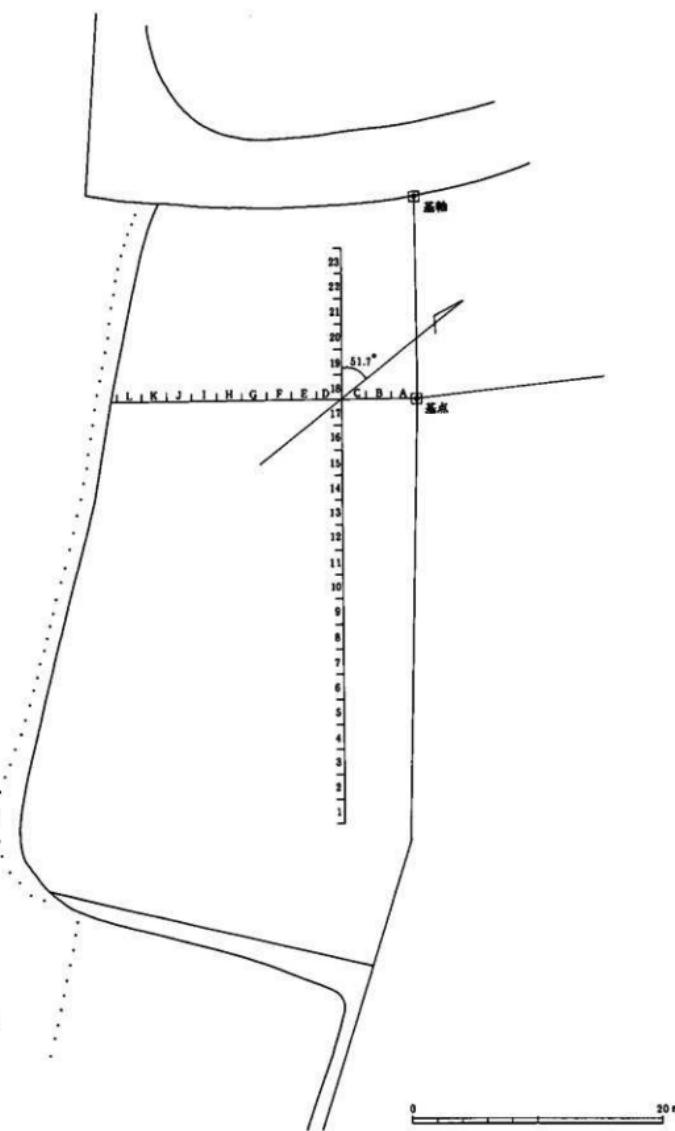
さらに、開善寺境内遺跡では中・近世の墓地が調査されている。「三昧処」という地名から開善寺に関連する三昧聖による葬送活動が展開されたと考えられ、藏骨器の出土とともに注目される。

地区内時又地籍では、天龍川が深く緩やかに縱んでおり、時又港が置かれた。港は江戸時代初期より飯田藩の江戸御廻米の船出港として栄えており、その他煙草・柿等が青谷（静岡県磐田郡竜山村）などに向け送り出された。明治以降、鉄道が開通したことや道路改修が進んで運送馬車が登場したことから通船は縮小され、竜東や南部山間地への物資の運搬等が中心となった。しかし、明治40年代以降、橋梁が次々に掛けられたり鉄道が延長されたりした結果、徐々に衰退していった（長野県教委 1990）。龍江城遺跡では船着き場と考えられる施設が調査されている（飯田市教委 1997a）が、時又地籍の試掘調査では確認されていない。

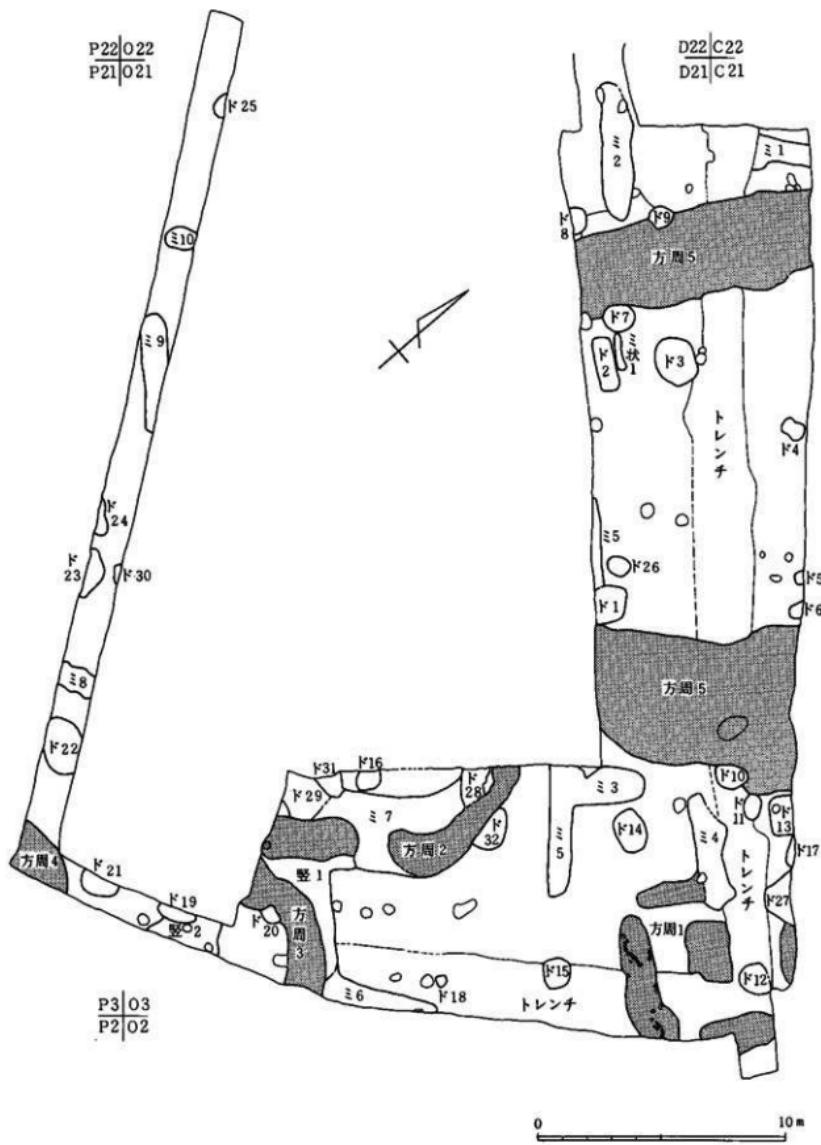
以上、環境を概観したが、竜丘地区は良好な環境に恵まれ、かつては飯田下伊那地方の政経で中心的役割を果たした地のひとつであったといえる。



挿図2 調査地点周辺地形図



挿図3 調査区の設定



挿図4 遺構全体図

第Ⅲ章 調査結果

第1節 調査区の設定（挿図3）

調査区の設定は、用地北側隣地境界南東端を基点に、また隣地境界線方向を基軸に定め、 $2 \times 2\text{ m}$ のグリッド設定を行った。グリッドの名称については、基軸方向西に向かって18・19…と数を増し、逆に東に向かい17・16…と数を減じる。また、基軸と直交方向に北側から南側に向かってA・B・C…と順にアルファベットを付した。基軸は磁北より 51.7° 西に偏する。

第2節 基本層序（挿図6）

基本層序は調査区北東際、方形周溝墓5の周溝・埴丘にかかる部分で把握した。耕土（I層）の下位に床土（II層）があり、以下部分的に分布するIII～VI層がある。遺構はVIIa・VIIb層を掘り込んでおり、地山上面で遺構を検出した。地山は方形周溝墓5の周溝で確認したところ、上層が疊混褐色土、下部は二次堆積の黄褐色砂質ロームとなっている。南西側トレンチの土坑22以西は地山が砂層となっており、遺構のプランは不鮮明で、検出は容易でなかった。

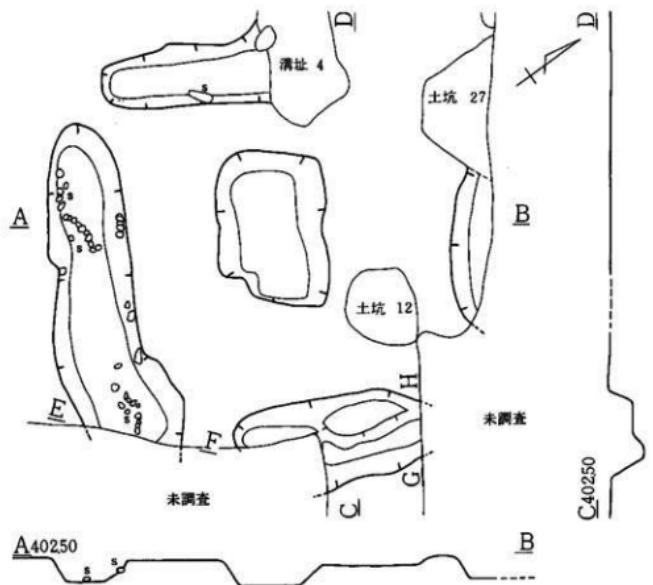
第3節 遺構と遺物

調査の結果、方形周溝墓5基・竪穴2基・土坑32基・溝址10条・溝状址1条等の遺構（挿図4）と、縄文時代前期後葉・古墳時代中期を中心とする遺物が出土した。

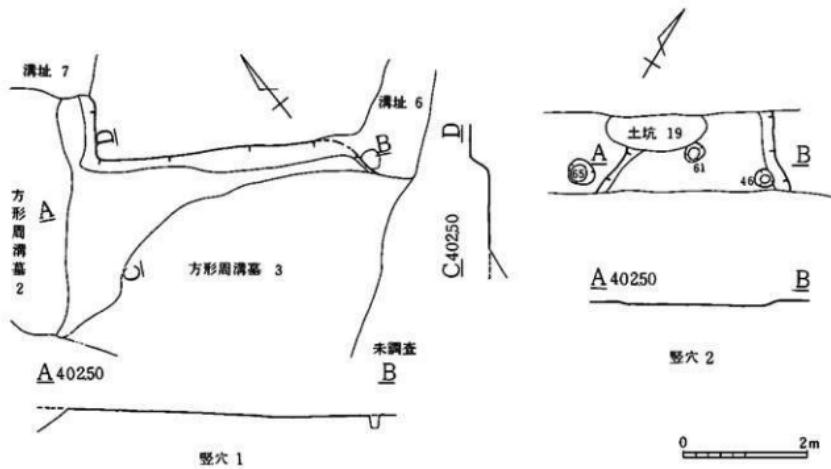
（1）方形周溝墓

①方形周溝墓1（挿図5）

【検出位置】C 3付近 [重複] 土坑12・27、溝址4と重複するが、溝址4との新旧関係は不明 【調査所見】北西辺の周溝は調査区外にかかる。南東辺の周溝は東側が一段低くなっている。さらに南東側に別の方形周溝墓があった可能性が高い。【規模】周溝内法 $4.8 \times 5.2\text{ m}$ 、周溝外法 $7.2 \times -\text{m}$ 【内法面積】 25.0 m^2 【形態】方形を呈する 【主軸】N 61.7° W 【周溝】 【規模】幅90～140cm、深さ18～54cm 【断面形】やや丸底に近い 【土橋部】四隅に土橋を有する 【埋土の状況】自然埋没と考えられる 【出土遺物】極めて少なく、細片のみである。非クロロ系土師器一棗？ 【主体部】 [有無] 有。底面は平坦で軟弱、壁はだらだらと立ち上がる 【形態】不整長方形 【規模】 $(2.6) \times 1.7\text{ m}$ 、深さ42cm 【主軸】N 59° W 【棺の形状】不明 【埋土の状況】南半は黒褐色土、その下位から北半にかけて黄土混褐色土 【付属施設】なし 【副葬品】なし 【その他】 【埴丘】削平を受けており、有無を確認できず 【外表施設】ないと考えられる 【付属施設】不明 【時期】遺物から時期決定はできない。



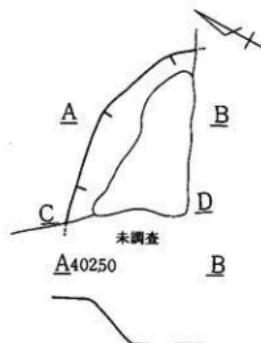
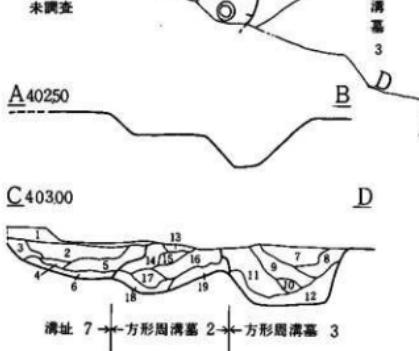
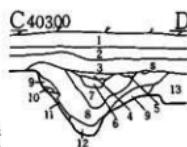
- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 灰褐色土(耕土) | 1. 灰褐色土(耕土) |
| 2. 黑褐色土 | 2. 灰褐色土(未分層) |
| 3. 黄褐色土混灰褐色土 | 3. 黑褐色土 |
| 4. 混凝灰褐色土 | 4. 黑色土 |
| | 5. 褐土混黑褐色土 |
| | 6. 墓葬地帶褐色土 |
| | 7. 墓葬地帶黃褐色土 |
| | 8. 黃色土 |



插図 5 方形周溝基 1 穴 1・2

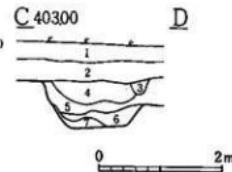


1. 灰褐色土 (淤土)
2. 黑褐色土
3. 黑色土
4. 黑色土混褐色土
5. 黑褐色土混褐色土
6. 黑色土
7. 黑色土混黑色土
8. 黑色土
9. 黑色土混黄色砂質土
10. 黄褐色砂質土
11. 黄褐色砂質土
12. 喀斯特黄色砂質土
13. 黄褐色土 (溝址 6)



1. 黑褐色土
2. 黑褐色土
3. 黄褐色土
4. 黄褐色土混黑色土
5. 黑色土
6. 黄褐色砂質土
7. 黑色土
8. 喀斯特黄色砂質土
9. 黑褐色土混黑色土
10. 喀斯特黄色砂質土
11. 黑色土 (灰面)
12. 黑色土
13. 黑褐色砂質土
14. 黑色土
15. 黑褐色土
16. 黑褐色土
17. 黑褐色土
18. 黑褐色土
19. 黑褐色土
20. 黑褐色土
21. 黑褐色土
22. 黑褐色土
23. 黑褐色土
24. 黑褐色土
25. 黑褐色土
26. 黑褐色土
27. 黑褐色土
28. 黑褐色土
29. 黑褐色土
30. 黑褐色土
31. 黑褐色土
32. 黑褐色土
33. 黑褐色土
34. 黑褐色土
35. 黑褐色土
36. 黑褐色土
37. 黑褐色土
38. 黑褐色土
39. 黑褐色土
40. 黑褐色土
41. 黑褐色土
42. 黑褐色土
43. 黑褐色土
44. 黑褐色土
45. 黑褐色土
46. 黑褐色土
47. 黑褐色土
48. 黑褐色土
49. 黑褐色土
50. 黑褐色土
51. 黑褐色土
52. 黑褐色土
53. 黑褐色土
54. 黑褐色土
55. 黑褐色土
56. 黑褐色土

1. 灰褐色土 (淤土)
2. 黑褐色土
3. 黑色土
4. 黑色土
5. 喀斯特黄色砂質土
6. 黄褐色砂質土
7. 黄褐色砂質土



插図 6 方形周溝墓 2 ~ 4 溝址 7

②方形周溝墓 2（挿図6、第9図11）

【検出位置】J 6付近 [重複] 方形周溝墓3と溝址7に切られる。土坑28と重複するが、新旧関係不明
【調査所見】底面の状態と断面の検討から溝址7とは別遺構と判明。東隅が歪んでおり、方形周溝墓5に形態が規制された可能性が指摘できる [規模] 周溝内法-×-m、周溝外法-×-m、深さ-cm
[内法面積]- m² [形態] 方形を呈すると考えられる [主軸] 南東辺の周溝からおよそN45°Wと推定される [周溝] [規模] 幅80~180cm、深さ40~80cm、土橋両脇で周溝は最も深い [断面形] 逆台形 [土橋部] 南東辺中央と考えられる位置に土橋あり [埋土の状況] 自然埋没と考えられる [出土遺物] 遺物量は僅少である。非クロクロ系土師器-壺F 2・壺F 1・壺?、不明鉄製品 [主体部] [有無] 不明 [その他] [墳丘] 削平を受けており、有無を確認できず [外表施設] ないと考えられる [付属施設] 不明 [時期] 古墳時代中期の遺構と考えられるが、詳細時期不明である。

③方形周溝墓 3（挿図6）

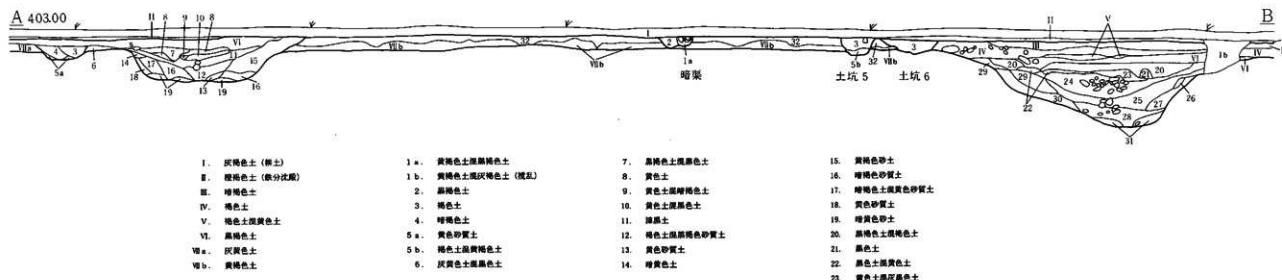
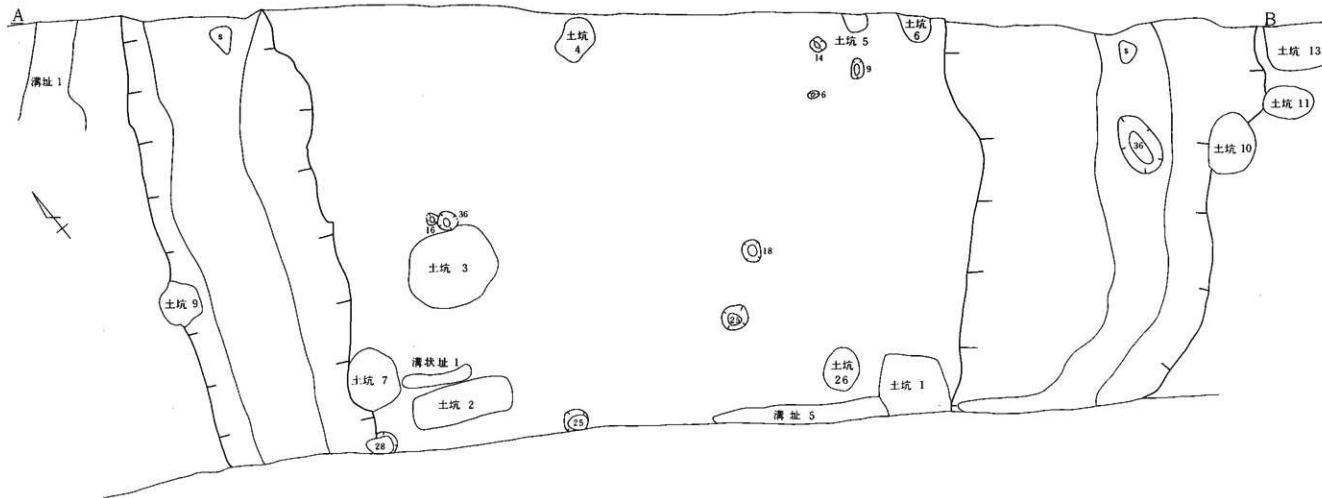
【検出位置】M 4付近 [重複] 方形周溝墓2・溝址6を切る。また、竪穴2および土坑19・21と重複する
【調査所見】断面形から方形周溝墓と判断した。北隅を検出したのみで、南東側トレンチでは西隅は把握されず [規模] 周溝内法-×-m、周溝外法-×-m、深さ-cm [内法面積]- m² [形態] 四隅がやや丸味を帯びた方形と考えられる [主軸]- [周溝] [規模] 幅140~200cm、深さ71~93cm [断面形] 上部が開いたV字形 [土橋部] 南東側トレンチで南西辺周溝が検出されなかったことから土橋を有すると考えられる [埋土の状況] 自然埋没と考えられる [出土遺物] 遺物量は僅少で、非クロクロ系土師器-壺F がある [主体部] [有無] 不明 [その他] [墳丘] 削平を受けており、有無を確認できず [外表施設] ないと考えられる [付属施設] 不明 [時期] 詳細時期は不明であるが、古墳時代中期に属すと考えられる。

④方形周溝墓 4（挿図6）

【検出位置】P 5付近 [重複] 検出位置からみて方形周溝墓3と重複ないし接すると考えられる [調査所見] 北隅を検出したにとどまる。底部はやや平坦で他の周溝墓と異なる。断面形は調査区際まで平坦となっているが、内法を掘りすぎており、把握地点がコーナー部分でやや不正確なもの、断面図を参照されたい [規模] 周溝内法-×-m、周溝外法-×-m [内法面積]- m² [形態] 不明 [主軸]- [周溝] [規模] 幅約90cm、深さ70~80cm [断面形] 逆台形 [土橋部] 不明 [埋土の状況] 自然埋没と考えられる [出土遺物] 遺物量僅少。非クロクロ系土師器-高杯・鉢Dが出土 [主体部] [有無] 不明 [その他] [墳丘] 削平を受けており、有無を確認できず [外表施設] ないと考えられる [付属施設] 不明 [時期] 古墳時代中期と考えられるが、詳細は不明である。

⑤方形周溝墓 5（挿図7、第1図1~4、第4図5、第9図12）

【検出位置】B～E・8～18 [重複] 土坑1～7・9～11・26、溝状址1と重複する [調査所見] 北西辺周溝は検出当初溝址1付近まで広がると考えられたが、西側部分は浅い帯状の落ち込みで、断面観察の結果別遺構と判断した [規模] 周溝内法13.4×-m、周溝外法23.6×-m [内法面積]- m² [形態] 方形を呈すると考えられる。南東辺中央部で周溝が外側へ張り出す可能性がある [主軸] N34.3°



插図7 方形周溝墓5

E 【周溝】 [規模] 北西辺周溝は幅3.2～3.6m、深さ114～137cmで、南東辺に比して幅が狭く、かつ浅い。南東辺周溝は幅4.2～6.8m、深さ108～159cmで、南端で幅が狭く、かつ浅くなる [断面形] 外法上半は立ち上がりが緩やかになる。また内法は外法よりも総体的に緩やかな立ち上がりを示す [土橋部] 不明 [埋土の状況] 稲ね上層は黒褐色土で、黄褐色砂質土を挟んで細分され、下部付近に貼り石と考えられる礫（径20～40cm）が帶状に検出された。礫は周溝底部より50～60cmほど上位に集中するが、これより下位にも若干ある。大半がほぼ同一レベルで分布することから、短期間に崩落したか、あるいは、人為的に周溝内に崩し落とされたものと考えられる。周溝上部の黑色土・黄褐色砂質土は水平堆積することから、貼り石が崩れた後相当期間埋まり切らなかったと考えられる。下層は褐色土。黄褐色砂質土は埴丘盛土が崩れ落ちたものと考えられる [出土遺物] 遺物量は少ない。非ロクロ系土器師一鉢C？・甕F？・壺B・須恵器一甕A・仕上磁石（持ち磁、泥岩）、鐵鐵が出土。混入遺物として、繩文一前期後葉・中期中葉土器、陶器片がある。南東辺周溝からの出土が多く、大半が周溝26層の出土である。壺Bは周溝底部よりやや浮くものの須恵器甕Aより下位に、また、磁石は須恵器甕Aとほぼ同レベルかやや上位から出土した [主体部] [有無] 土坑2が長方形を呈することから本址の主体部である可能性も考えられるが、位置が極端に周溝に寄っていること、長軸方向が北西辺周溝とは違和感がないものの総体ではやや西に振っていることから本址の主体部ではないと判断した。削平され遺存していないものと考えられる [その他] [埴丘] 上部は削平されて埴丘の遺存状態は悪いが、周溝内法の立ち上がりから見る限り、高い埴丘を有していたとは考え難い [外表施設] B10付近南東辺の埴丘裾部付近に貼り石と考えられる礫が僅かに残存していたこと、上述のとおり周溝内から礫が多量に検出されたことから、埴丘には貼り石がなされていたと考えられる。しかし、どのように貼り石がなされていたかは不明 [付属施設] 不明 [時期] 出土須恵器甕から、古墳時代中期、5世紀中葉に比定される。

(2) 壺穴

①壺穴1（挿図5、第4図1・2）

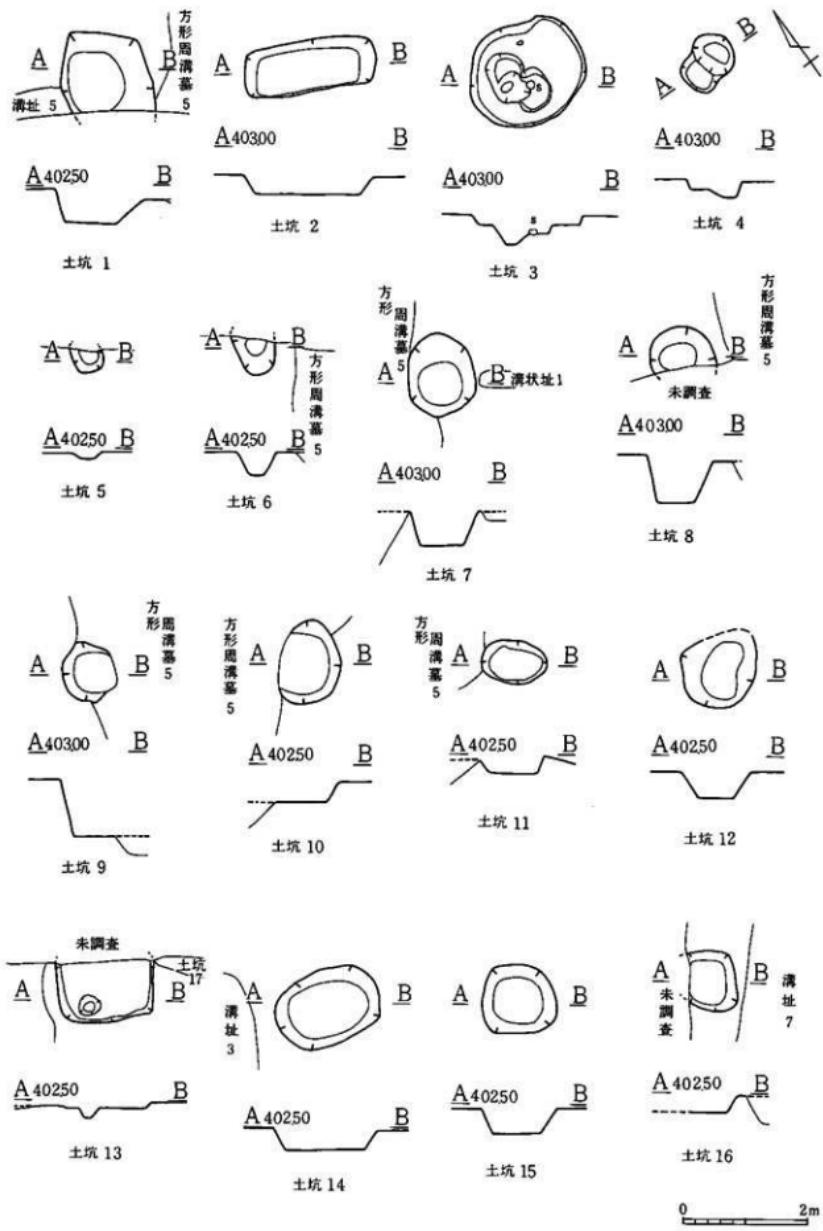
底面はほぼ平坦かつ軟弱であり、壁はやや急な立ち上がりを示す。埋土黒褐色土である。本址と溝址7上部付近から遺構外遺物として掲載した布目瓦2点（第4図1・2）が出土した。溝址7・土坑20とともに寺院址に関連した遺構である可能性が高い。

②壺穴2（挿図5）

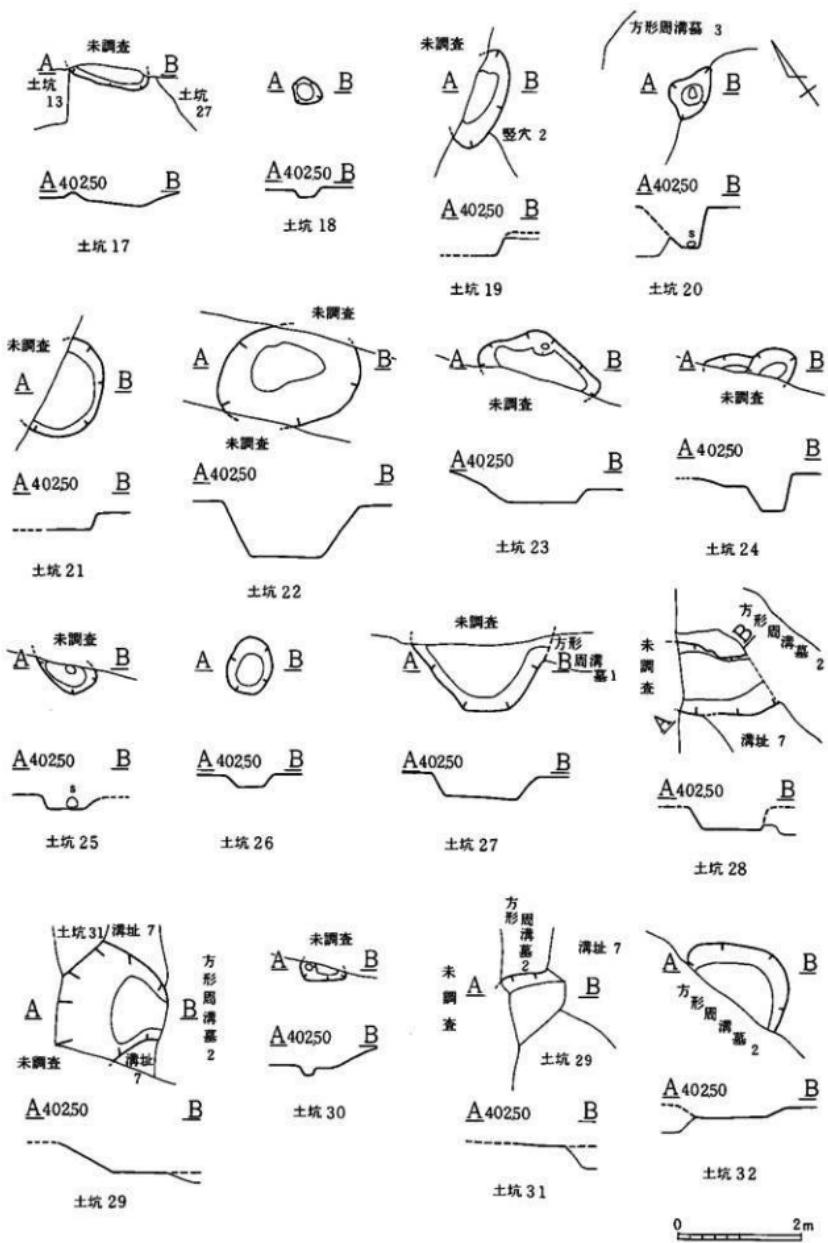
南東側トレンチN4付近で検出され、形態等不明な点が多く、とりあえず壺穴とした。埋土褐色土である。底面はほぼ平坦で、硬く締まる。壁の状態は不明で、遺物出土はない。

(3) 土坑（挿図6・7、第1図5～第2図、第4図6～13、第9図1～3）

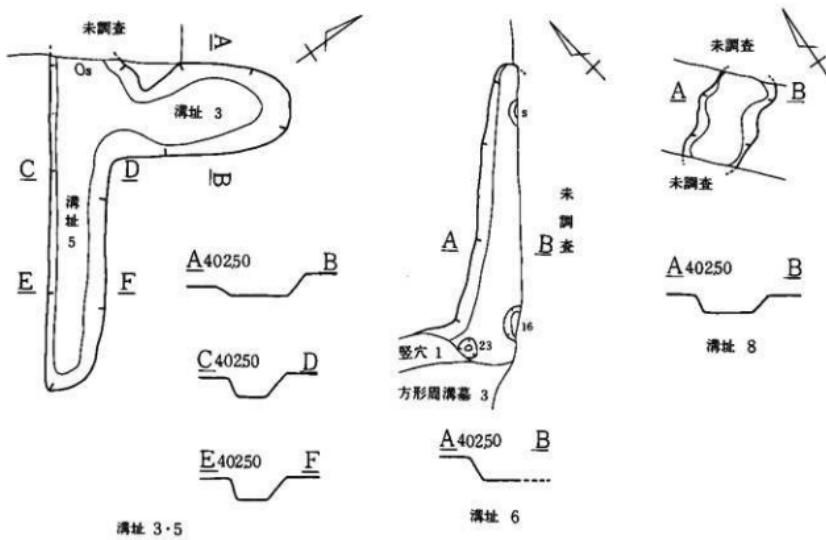
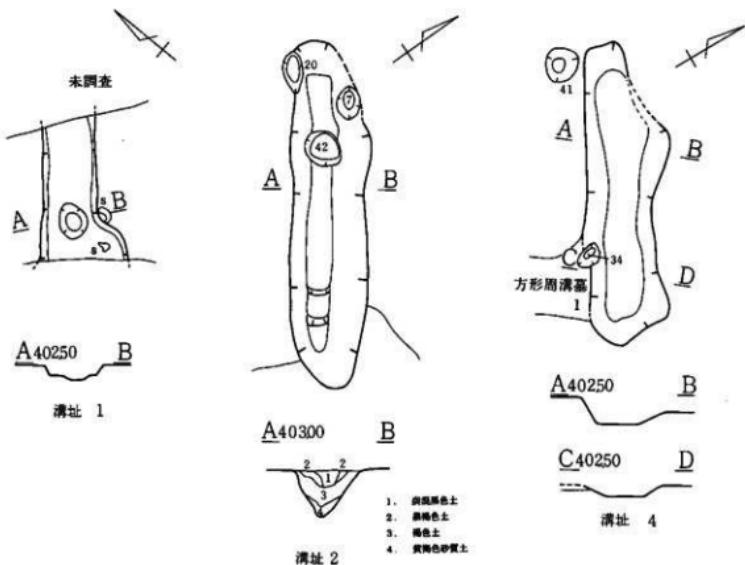
土坑1は不整形形を呈すると考えられ、底面は軟弱で平坦である。第1図5は半截竹管により条線が施される。土坑2は底面がほぼ平坦で、壁は緩やかな立ち上がりを示す。土坑3は概ね断面皿状を呈し、部分的に掘りくぼんでいる。検出面では北東側に黄褐色土が上がっており、風倒痕である可能性もある。第1図6は結節浮線文が施され、口縁端部にも竹管で連続押し引きされる。7は結節沈線文、8・9は繩文、10は条線が施される。土坑1・3は繩文時代前期後葉に比定される。土坑7は底面が平坦で、



插図 8 土坑 1 ~ 16



插図 9 土坑17~32

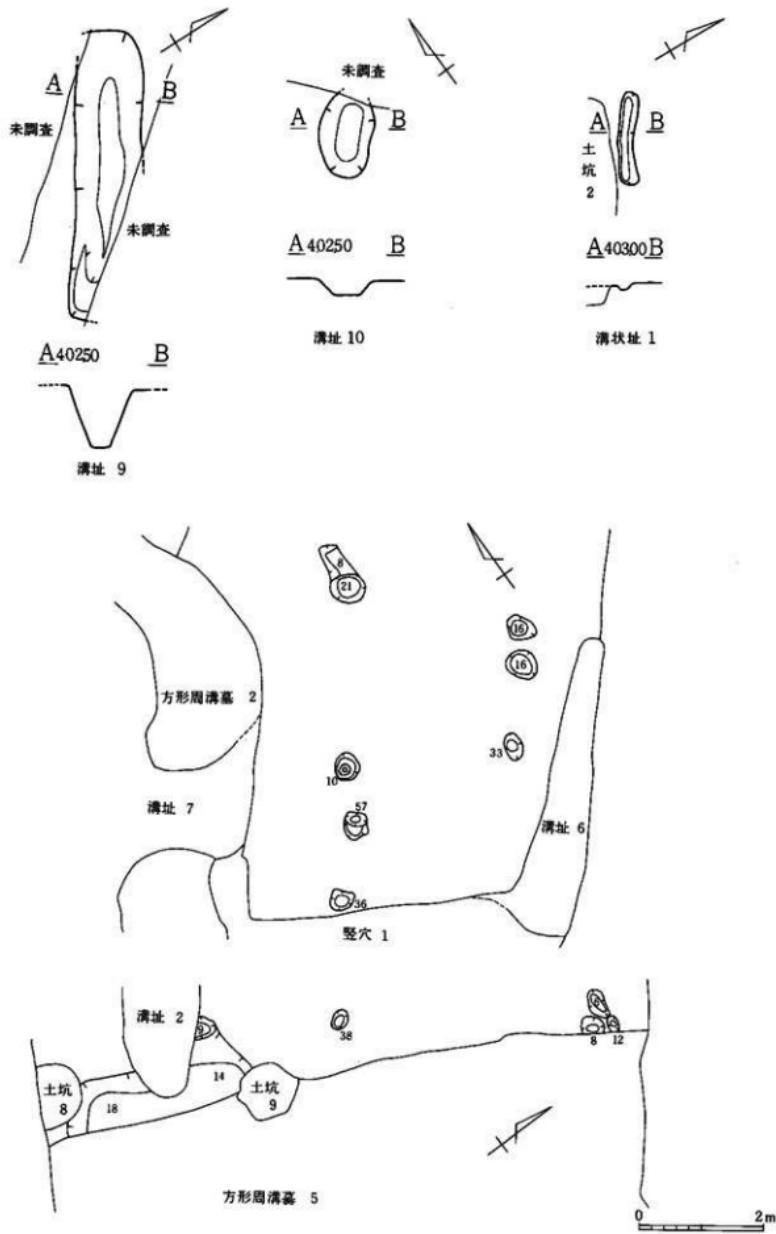


播図10 溝址 1 ~ 6 + 8

壁は東側がやや急に立ち上がるのに対して、南北壁は緩やかに立ち上がる。遺物が多く出土している。第1図12・14・15は結節浮線文が施文され、12は口縁端部にも竹管で連続押し引きされる。13は斜位の条線を地文に、浮線文上に条線が施される。浮線文による三角形のモチーフ内には貼付文が付される。17は地文条線で屈曲部に爪形文が配され、以下に貼付文が付される。16・18・25は条線、19~24は縄文が施文される。19は原体L Rの単節縄文が斜位施文される。22~24は同一個体である。24・25は底部が外側に張り出し、24は縁辺部に刻みが施される。縄文時代前期後葉に比定される。土坑8は不整円形を呈する。底部は丸底状で、壁上部は直立する。第1図26~28は浮線文に条線で刻みが施され、27・28は地文に条線が施されている。29は半截竹管による矢羽根状の集合沈線、30は結節沈線文、31は結節浮線文が施される。31は地文が竹管による条線文で、上に鋸齒状に結節沈線文が配される。土坑9は円形に近い不整方形を呈し、底部は平坦で壁は垂直に立ち上がる。底部より約30cm浮いて礫が出土した。第2図1・2は同一個体で、口縁波状を呈する開いた器形で、縄文地文・口縁部に結節沈線文が施される。他に黒曜石素材の石核（第9図1）が出土した。土坑7~9はいずれも埋土褐色土で、縄文時代前期後葉の遺構である。土坑10は底面が平坦で軟弱であり、壁は緩やかに立ち上がる。遺物出土はなく時期不明であるが、形態等は縄文時代前期後葉の土坑に類似する。土坑11は地山起源の細かい礫が埋土中に入り、礫下から縄文土器片が僅かに出土している。第2図3~6は同一個体、地文R Lの単節縄文縦位施文で縦位に沈線が施される。時期等詳細は不明である。土坑13・18は縄文時代前期後葉、土坑17は同中期中葉の遺物が出土しており、該期に比定される。土坑19からは前期後葉の遺物出土が多く、第2図8は半截竹管により波状文が、9は浮線文に条線で刻みが施される。灰釉陶器碗が混入出土する。第9図2は赤色珪岩製の縦型の石匙である。土坑20はほぼ円形の掘り方であったが、壁上部の一部が崩落した。埋土黒褐色土で底面付近に礫が入る。建物址の柱穴の可能性も考慮したが、組み合う柱穴は把握できなかった。布目の平瓦（第2図16）および丸瓦（同17）が出土した。土坑21は不整円形を呈すると考えられる。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦かつ軟弱である。第2図10・11は条線が施される。第9図3は黒曜石製で、石鎚より大形であることから、尖頭器の先端と考えられる。土坑22は不整梢円形を呈し、南壁は緩やかな立ち上がりを示す。底面は平坦で、地山が砂のため壁・床とも軟弱である。第2図12は地文縄文で沈線文施文され、他に条線（13）、集合沈線（14）、縄文（15）施文がある。土坑23・24・30は、地山が砂のため検出が容易でなく、結果として掘りすぎている。土坑28は不整長方形を呈すると考えられるが、調査区外に延びるため溝址の可能性もある。埋土黒褐色土である。土坑29は一部調査区外にかかるため詳細は不明であるが、竪穴1・土坑28・溝址7との関連が想定される。

（4）溝址（挿図6・10・11、第5図1~8）

溝址1は幅80~140cm、深さ約20cmと浅く、底面は平坦である。埋土の下部は砂気が強いことから、方形周溝墓の周溝でなく、水路かと考えられる。直接の切り合いはないが、方形周溝墓5より新しいと考えられる。溝址2は断面V字状で、方形周溝墓の周溝とは形態を異にする。壁はやや急に立ち上がり、埋土上部中央に炭が混じる。土師器甕が出土した他、東側から縄文時代前期後葉・中期中葉の遺物が出土している。溝址3は底面が平坦で壁はやや緩やかに立ち上がる。南端部は溝址5とレベルがほぼ揃っており、連続すると考えられる。また、溝址3・4は直交方向にあることから、方形周溝墓1と周溝を共有する周溝墓の可能性がある。溝址3からは土師器甕と考えられる細片、溝址4からは土師器細片、



插図11 溝址 9・10、溝状址 1、周辺柱穴平面図

溝址 5 から土師器甕と考えられる細片と縄文時代前期後葉の土器が出土した。溝址 6 は壁が急な立ち上がりを示し、底面は平坦かつ軟弱である。北東隅に礫が集中する。調査区外に延びており、あるいは溝址でないかもしれない。土師器甕と考えられる細片と、縄文時代前期後葉・中期中葉の遺物が出土した。溝址 8・10 は、地山が砂のため検出が容易でなく、結果として掘りすぎている。溝址 9 は一部調査区外にかかるが、南東端もほぼ把握できたと考えられる。底面はほぼ平らで、壁はやや急に立ち上がる。縄文時代前期他の遺物が出土した。

(5) 溝状址（挿図11）

溝状址 1 は断面 U 字状を呈し、埋土中にわずかに炭が混じる。

(6) 周辺柱穴（挿図11）

竪穴 1 と溝址 6・7 に囲まれた部分に小柱穴の集中する部分がある。建物址を構成する可能性がある。

(7) 遺構外出土遺物（第3図14～第4図4、第5図9～第8図、第9図5～10・13・14）

第3図14～33は縄文時代前期後葉の土器群を一括した。14は半截竹管により描かれたモチーフの上に条線が施される。16・19は条線地文で結節浮線文、17・20・21は結節沈線文、18は条線地文で浮線文上に条線で刻みが施される。22は地文縄文で平行沈線文が、24は地文条線で半截竹管の連続押し引き文が25・26・29は条線文がそれぞれ施される。33は胎土に石英を多く含み、隆帯上に縄文、以下沈線が施される。他地域から搬入されたと考えられるが、時期等詳細は不明である。34～37は中期中葉の土器群を一括、36は中葉末の細隆線文である。38～43は中期後葉で38～41は褶曲文、また、44は後期中葉の遺物である。第4図1は布目の平瓦、2は同丸瓦、3は須恵器甕片、4は灰釉陶器壺である。

第5図9～第6図13は中・小型の打製石斧類を一括した。緑色岩（第5図9・11・12、第6図1・4・6・9・10・12）と硬砂岩製が相半ばしており、これ以外の素材として第6図11の安山岩製と考えられるものがある。横刃型石器はほぼ全面に剥離がおよぶもの（第6図14～第7図1）と、大きく自然面を残すもの（第7図2～22）とがある。緑色岩（第6図16・20、第7図6）、珪質片岩と考えられるもの（第6図17・19）、石材不明（第7図1）以外は硬砂岩素材である。第8図1・2は磨製石斧、3・4は敲打器で、いずれも緑色岩製である。5・6は硬砂岩製の礫石錐で長辺の両端が打ち抉かれている。7は三角形の各隅が打ち抉かれているもので、田圃遺跡（飯田市教委 1993）に類例がある。敲打器とも考えられるが、同じく硬砂岩素材である。8は擦痕のある小礫である。9～11は砥石で、9・10は持ち砥石、11は置き砥石である。10は砂岩、9・11は石材不明である。12は花崗岩製の石皿である。第9図5は身がやや厚い石匙、6はビエス・エスキュー、9は側縁に微細剥離痕を有する。8は尖頭状の作りだしに微細剥離痕をとどめる。5～8は黒曜石製（このうち8は抉雜物が多く含まれる）、9は珪岩である。10は弥生時代後期の磨製石錐未成品で、珪質片岩製である。

第IV章 総括

調査された遺構・遺物の内容は以上のとおりである。これらは主に、縄文時代前期・古墳時代中期に属するもので、特記されるものについて概観し総括としたい。

1. 縄文時代の集落

縄文時代前期後葉に比定される遺構は土坑群と溝址9があり、調査区ほぼ全体で疎らに検出されている。また、他時期の遺構に混入出土する遺物をみても同様な広がりをみせている。同時期ではないが、前期終末～中期初頭の集落がある程度調査されている遺跡として、座光寺美女遺跡（飯田市教委 1998b）、上郷黒田大明神原遺跡（同 1997b）がある。これらをみると、住居址と土坑群の分布域は接してはいるもののズレがあり、集落の中で場の機能が分化していたことが見て取れる。また前期初頭に遡る田井座遺跡（同 1988）では、やはり住居址群と土坑群が分布を異にしており、集落が環状構造をとる可能性が指摘されている。

今次調査区内では炉址等竪穴住居址の施設や痕跡は確認されていないが、土坑の遺存状態は比較的良好なことから、削平を受けて竪穴住居址等が遺存しないというより、今次調査地点が集落の周縁ないし広場に近い部分にあたると考えられる。

2. 縄文時代前期後葉の土器

今次調査で出土した前期後葉の土器群の内容は、モチーフや器形等全体を把握できるものはないが、①地文条線文で浮線文上に細かい条線により刻みが施されるもの、②地文縄文で浮線文上に縄文が施文されるもの、③地文条線で結節浮線文によりモチーフが描かれるもの、④地文条線で結節沈線文によりモチーフが描かれるもの、⑤条線で鋸歯状等の文様が描かれるもの、⑥地文条線で爪形文が施文され、貼付文が配されるもの、⑦沈線・平行沈線でモチーフが描かれるもの、⑧集合沈線、⑨条線・縄文施文のもの等がある。このうち⑨については①～⑥の体部破片である可能性がある。①・②は諸磯b式、③・④・⑧は諸磯c式の特徴とされる。また、⑤の鋸歯状の文様は諸磯a式の特徴とされる。

一方で、①は諸磯b式では一般に浮線文上の刻みが斜めに施されるものが多いのに対して、本遺跡例は浮線に直交方向に施されること、③に厚手の土器が多いのに対し、④は①とともに薄手であるといった特徴があり、地域的な様相と捉えることが可能である。

今次調査出土遺物は、一部諸磯a式の影響が認められるものの、その主体は諸磯b式・c式の影響が強く受けた土器と考えられる。なお、諸磯b式は3細分（今村 1982、百瀬 1985、他）、諸磯c式は2細分（今村 同前、他）される他、b・c式を5段階に細分する論考もある（赤塩 1996）。その中で、具体的にどの細分型式・段階に相当するかは、本遺跡の限定された内容からは詳述は避けたい。ただ、C字状の連続爪形文が見られない点で今村啓爾（同前）のいう諸磯b式中段階以降に相当すると捉えておきたい。

長野県南部地域では東海・関西系の北白川下層式の影響が強いとされ、飯田市内でも立野遺跡で主たる存在ではないものの、北白川下層式が出土している。本遺跡の場合、北白川下層式は出土しておらず、

東海・関西系の影響は少なく、唯一第1図17に関西系の爪形文と貼付文の併用がみられ、北白川下層の影響が窺える程度である。こうした状況は、川路今洞遺跡においても同様であり、天竜川沿岸部と西部地域の差と考えができる。北白川下層系の受容に時間的な変化があるのか、それとも地域差であるのか、その解決は今後の課題といえよう。

3. 古墳時代の墳墓群

該期の墳墓群としては方形周溝墓5基があり、他に検出状況から方形周溝墓の周溝と考えられる溝址がある。

周溝墓の名称については、「遺構検出時点の状況からだけで、基準もあいまいなまま古墳と周溝墓という異なる名称を用いることには問題がある」ことが既に指摘されている（飯田市教委 2000a）。古墳の定義はさまざまに試みられているが、一般に「平面空間だけでなく、より明確に普通の土地と区別するため、墳丘を石や土で築いたもの（森・白石 1976）として墳丘墓と区別されている。今次調査された方形周溝墓5は周溝外法で23mを超える大規模なものであり、規模からすると古墳と言いうるものである。しかし、周溝の断面形がやや開いたV字形を呈すること、ごく一部分であるが墳丘の立ち上がりが把握された部分では低い墳丘であったと考えられることから、方形周溝墓として取り扱った。

この周溝墓では、周溝埋土中位の内側を中心に径20~30cm大の河原礫が多数検出されており、検出状況から洪水等に起因するものと考え難く、貼り石を備えていたものが、時間が経つてから周溝内に崩落したものと判断された。なお、東側墳丘裾部には一部貼り石が遺存すると考えられる部分があった。

こうした貼り石を持つと考えられる方形周溝墓は、竜丘地区蒜田遺跡（未報告）、松尾城遺跡方形周溝墓1（飯田市教委 1991c）、同八幡原遺跡方形周溝墓7（同 1992a）、同田圃遺跡方形周溝墓1（同 1993c）、同寺所遺跡SM01・SM03（同 1999a）、同水城遺跡SM01（同 1999b）で調査されている。多くの例が周溝の底部付近から石を貼っているのに対して、本遺跡例と城遺跡・水城遺跡例は周溝内に疊が転落している状態が調査されている。殊に本遺跡方形周溝墓5の場合、周溝内法には確実に貼り石されておらず、墳丘部分のみの貼り石と考えられる。墳丘のみ石が貼られる点では古墳の葺石とも異なっている。城遺跡例について山下（2001）は別系譜の可能性を指摘しているが、傾聴すべきであろう。

貼り石をもつ方形周溝墓の時期は、弥生時代後期後半から古墳時代中期までまたがっており、これまでのところ古墳密集地帯である竜丘・松尾地区に限られている。城遺跡方形周溝墓1は諸例の中で最古の弥生時代後期後半に位置づけられる。

八幡原遺跡方形周溝墓7は周溝墓群のはば中央で検出されており、墳墓群の中心的な存在と指摘されているが、規模だけみると方形周溝墓11・20・24（同 1992a・b）といった規模の大きな周溝墓がある。前者者が重複関係や構築箇所・形態等から、3期に区分される構築時期のうち第1期に比定されるのに対し、後者は第2期と後出である。

寺所遺跡ではSM01が、古墳とも考えられる、より規模が大きく円形を呈するSM04に切られている。いずれも古墳時代中期に位置づく。田圃遺跡でも方形周溝墓1は古墳時代前期と考えられるのに対し、これより規模の大きな周溝墓群は5世紀中葉~6世紀初頭に位置づけられている（飯田市教委 2000b）。また、田圃遺跡ではSM06→SM08→SM04の変遷から、中期から後期にかけて形態が方形から円形

へ変遷することが指摘されている。古墳の可能性のある寺所遺跡SM04や田園遺跡SM04の他に、市内では僅かであるが円形周溝墓の調査例がある。崩れた方形ととらえられる周溝墓が多いが、中村中平遺跡方形周溝墓2（同 1994）、小垣外・辻垣外遺跡方形周溝墓1（同 1995b）、恒川遺跡群恒川A地籍溝址2（同 1986）、ミカド遺跡円形周溝墓1・2（上郷町教委 1989）、田園遺跡SM08、殿原遺跡円形周溝墓1（飯田市教委 1987）、新井原・石行遺跡円形周溝墓（下伊那誌編纂委員会 1991）である。恒川遺跡群例は古墳時代前期に、また田園遺跡SM08例は5世紀後葉に位置づけられている。これに対し、ミカド遺跡では、詳細は不明であるが、弥生時代後期と考えられており、殿原遺跡でも同後期後半に位置づけられている。

さらに、寺所遺跡SM04や田園遺跡SM04が中期に位置づけられているし、古墳についてみると、当地方初源期の古墳に位置づけられている物見塚古墳（同 1992c）も同様という状況である。

以上の各遺跡の状況を整理すると、周溝墓の変遷は、

①貼り石を持つ方形周溝墓は弥生時代後期後半に登場し、一部古墳時代中期にまで残存する。

②円形周溝墓は弥生時代後期には少數ながら登場し、古墳時代中期には主要な墳墓の形態として採用されていく。

なお、本遺跡の方形周溝墓5では、南東辺中央部で周溝が外側へ張り出す可能性が指摘された。田園遺跡SM04とは方形周溝墓・円形周溝墓と形態を異にするものの、周溝が張り出し、かつその部分で最深を測る点で類似している。

方形周溝墓1は周溝の四隅が切れるタイプの方形周溝墓で、主体部と考えられる施設が中央に位置している。また、溝址3～5も方形周溝墓1の北西辺の周溝を共有して、周溝墓である可能性がある。いずれも、今次調査の他の周溝墓に比較して小型である。こうした四隅に土橋部をもつタイプの周溝墓は、これまでのところ飯田下伊那地方には確実な例はない（山下 2001）。敢えて類例を求めるすれば、龍江阿高遺跡方形周溝墓6で隅に土橋部が確認されているが、試掘トレンチに切られ全体形は不明である。この周溝を共有すると考えられる周溝墓は、方形周溝墓2・3・5が周溝を接して構築されているとの対照的であり、方形周溝墓2～5の空いたスペースに構築されたとも考えられる。方形周溝墓1は出土遺物がなく、また溝址3～5からは土師器細片が出土しているのみで即断できないが、他の周溝墓群の構築時期から古墳時代中期以降に位置づく可能性が指摘される。形態が不整形である点で本遺跡と異なるが、八幡原遺跡では第3期に周溝墓群の空いたスペースに小型の周溝墓が構築されており、本遺跡例と共通することも考えられる。

弥生時代には、四隅が切れるタイプの周溝墓は東海地方に多いとされ、佐久市北西の久保遺跡第1号方形周溝墓（佐久市教委 1984）も同地方とのつながりが指摘されている（三木 2001）。北信では円形周溝墓が多いのに対して南信で方形周溝墓が多い理由として、東海地方の影響が考えられている。

一方で、周溝墓を作る単位集団より下位の人々の墓も山下誠一（2002）によって取り上げられている。こうした墓が八幡原遺跡においては小型の周溝墓と同様空いたスペースに作られることは、新たな造墓集団として台頭していくことを示しているのかもしれない。

以上、本遺跡およびこれまでの調査例から、古墳時代前期から中期にかけての墓の形態は多様であっ

たことが窺える。この多様な墓のあり方は、古墳導入期における飯田下伊那地域の社会様相の多様性を物語るものと考えられる。即ち、支配層が中央との関係により古墳を受容していった一方で、それに準じる集団が旧来の墓制を踏襲する姿が考えられる。

集落との関わりからみた墓域のあり方は古墳時代中期を境として大きく変化し、その背景として集団内に階層差が現れてくる古墳導入期の社会的変化が山下によって指摘されている。本遺跡に周溝墓や古墳を築造した集団がその生活を営んだ場は一段丘下位の開善寺境内遺跡と考えられ、八幡原遺跡・田圃遺跡や、宮垣外・高屋遺跡と同じように集落と墓域を異なる姿が読みとれる。残念ながら墓域に比べると集落の全体像が把握されるような調査事例はまだなく、集落との関わりを十分に把握できる段階ではない。

4. 出土古瓦について

今次調査区の南側部分では、時期・性格等詳細が不明な遺構として溝址・竪穴・小柱穴等があり、その中には古墳時代終末から奈良時代にかけての布目瓦出土地点周辺で検出されたものがある。断片的に把握されたのみで推測の域を出ないが、寺院址に関連する可能性が指摘される。市内では、奈良・平安時代の寺院址と考えられる遺構が確認された遺跡として、座光寺新井原・石行遺跡、毛賀御射山遺跡、川路辻前遺跡が挙げられる。新井原・石行遺跡では、区画施設と考えられる溝址から押出仏が出土した(飯田市教委 1999c)。毛賀御射山遺跡では平安時代前期の掘立柱建物址・竪穴に伴って瓦・瓦塔が出土している。辻前遺跡では掘立柱建物址群の一画から佐波理鏡・布目瓦が出土しており、寺院址の存在が推定される。いずれも具体的に建物配置を復元するまでに至っていないが、これらの寺院址・古瓦出土地点が古墳密集地帯であり、とりわけ近くに前方後円墳が構築されていることからみて、すでに指摘されているように、支配勢力が古墳築造から氏寺建立へ転換していった時期の遺跡として注目すべきことは疑いない。

また、本遺跡と同型と考えられる布目瓦は上川路廃寺や辻前遺跡から出土しており、今次調査地点南側ないし久米川対岸の段丘縁辺部に瓦窯があった可能性も考えられる。時期を異にするが、川路殿谷遺跡では朝顔形埴輪・家形埴輪・人物埴輪等が出土しており、段丘縁辺部に埴輪窯の存在が推定される状況である。今後、これまで保護措置を講じてこなかったこうした段丘縁辺部に対しても慎重な対応が必要となってこよう。

以上、縄文時代前期の集落および古墳時代中期の墳墓群を中心に調査結果を総括したが、限定された調査面積とはいえ得られた考古学的所見は多く、殊に古墳時代の墓域の実態解明は飯伊地域の古代史解明の上で重要な位置を担うと考えられるものである。今後、調査地点周辺はもとより、市内各所で文化財保護の本旨に則って地道な活動を続けることにより、上述の諸課題が解明されることは改めて言うまでもないことであり、たゆまぬ保護活動を確認して、本書の終わりとしたい。

《引用参考文献》

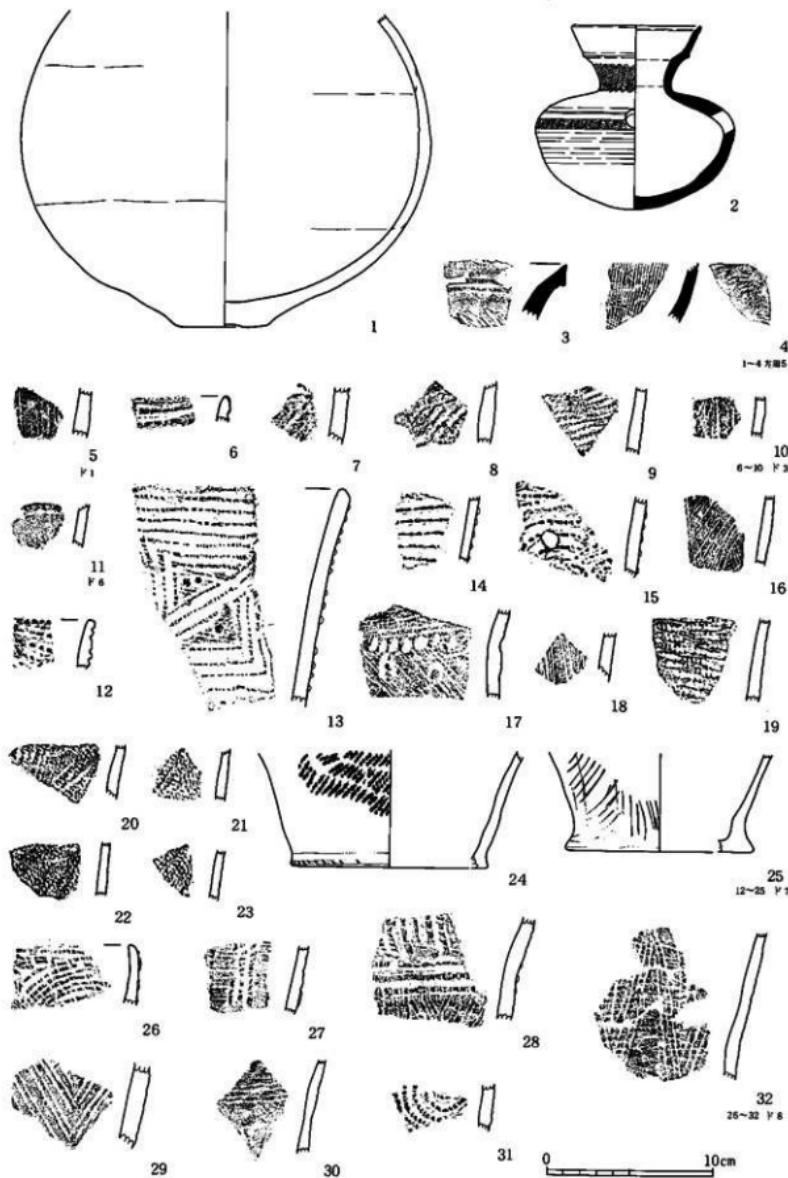
- 赤塙 仁 1996 「諸磯 b・c 式土器の変遷過程」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集 I
- 飯田市教育委員会 1967 『鏡塚発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1968 『内山・花の木発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1974a 『小池・宮城・神送塚』
- 飯田市教育委員会 1974b 『開善寺境内遺跡』
- 飯田市教育委員会 1975 『前の原・塚原』
- 飯田市教育委員会 1976 『駄科北平遺跡』
- 飯田市教育委員会 1978 『毛賀御射山遺跡』
- 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』
- 飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1988 『田井座遺跡』
- 飯田市教育委員会 1990a 『鈴岡城址』
- 飯田市教育委員会 1990b 『前の原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1991a 『ガンドウ洞遺跡・飯田城跡』
- 飯田市教育委員会 1991b 『開善寺境内遺跡』
- 飯田市教育委員会 1991c 『城遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992a 『八幡原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992b 『八幡原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1992c 『八幡原遺跡 物見塚古墳』
- 飯田市教育委員会 1993a 『久井遺跡』
- 飯田市教育委員会 1993b 『三尋石(Ⅱ)遺跡・富士塚遺跡・中村中平遺跡・西の塚遺跡』
- 飯田市教育委員会 1993c 『田圃遺跡』
- 飯田市教育委員会 1994 『中村中平遺跡』
- 飯田市教育委員会 1995a 『安宅遺跡』
- 飯田市教育委員会 1995b 『小垣外・辻垣外遺跡』
- 飯田市教育委員会 1996a 『久保尻遺跡』
- 飯田市教育委員会 1996b 『上野遺跡・金井原瓦窯址』
- 飯田市教育委員会 1997a 『龍江城・龍江阿高遺跡』
- 飯田市教育委員会 1997b 『黒田大明神原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998a 『内山遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998b 『美女遺跡』
- 飯田市教育委員会 1999a 『寺所遺跡』
- 飯田市教育委員会 1999b 『水城遺跡』
- 飯田市教育委員会 1999c 『新井原・石行遺跡』

飯田市教育委員会	2000a	『宮垣外遺跡 高屋遺跡』
飯田市教育委員会	2000b	『田畠遺跡（II）』
飯田市教育委員会	2001	『開善寺境内遺跡』
飯田市教育委員会	2002a	『開善寺境内遺跡』
飯田市教育委員会	2002b	『月の木遺跡 月の木古墳群』
飯田建設事務所	1969	『安宅・大島』
今村啓爾	1982	「諸磯式土器」「縄文文化の研究3 縄文土器I」雄山閣
大沢和夫	1961	「前林発見の瓦塔について」『伊那』7月号
上郷町教育委員会	1989	『ツルサシ遺跡 ミカド遺跡 増田遺跡 垣外遺跡』
佐久市教育委員会	1984	『北西の久保』
邊那真周	1966	「飯田市竜丘宮洞発見の堆仏について」『伊那』4月号
下伊那史編纂委員会	1955	『下伊那史 第2巻』
下伊那史編纂委員会	1955	『下伊那史 第3巻』
下伊那史編纂委員会	1967	『下伊那史 第5巻』
下伊那史編纂委員会	1991	『下伊那史 第1巻』
下伊那史編纂委員会	1984	『下伊那誌 第1巻 地質編』
下伊那地質誌編集委員会	1976	『下伊那の地質解説』
竜丘村誌編纂会	1968	『竜丘村誌』
長野県	1961	『重要文化財開善寺山門修理工事報告書』
長野県教育委員会	1990	『天竜川』歴史の道調査報告書XXX
長野県教育委員会	1992	『ギフチョウの保護活動と棲息環境の保全 古墳の景観保存のための啓蒙について』
長野県史刊行会	1983	『長野県史 考古資料編 主要遺跡（中・南信）』
長野県史刊行会	1988	『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』
長野県史刊行会	1989	『長野県史 通史編 第1巻 原始・古代』
三木 弘	2001	「1章・1 集団墓、首長墓そして王墓」「弥生クロスロード－再考・信濃の農耕社会－」大阪府立弥生文化博物館平成13年秋季特別展
百瀬新治	1985	「長野県における諸磯式土器について」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
森 浩一・白石太一郎	1976	「4 古墳時代」『考古学ゼミナール』山川出版社
山下誠一	2001	「飯田盆地における周溝墓の動向－弥生時代から古墳時代の墓制の一様相－」 『飯田市美術博物館研究紀要』第11号
山下誠一	2002	「飯田盆地における周溝墓再論－集落と墓域の関係を中心として－」 『飯田市美術博物館研究紀要』第12号

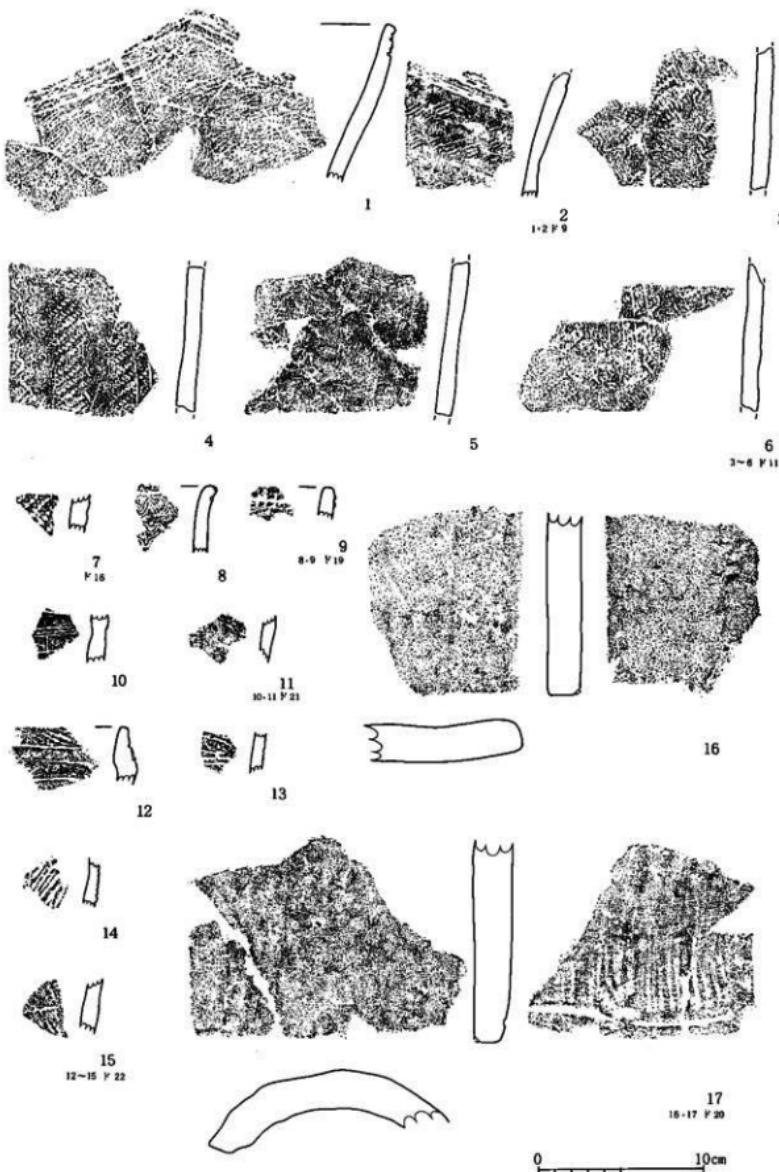
遺構名	地點	法量 (cm)	埋土	長軸	平面形	出土遺物	時期
土坑1	F11	- × 148 × 53	偏混黑褐色土	N38° E	不整	縄文 - 前期土器	縄文前期後葉
土坑2	F16	212 × 80 × 32	黑褐色土	N62° W	不整長方		
土坑3	D16	194 × 164 × 16(30~46)	黑褐色土	N84° W	橢円	縄文 - 前期土器、打製石器(硬)	縄文前期後葉
土坑4	B14	94 × 70 × 16(27)	黑褐色土	N75° E	不整橢円		
土坑5	B11	48 × - × 8	褐色土	-	-		
土坑6	B11	- × 66 × 35	褐色土	N29° E	-		
土坑7	E16	130 × 106 × 56	褐色土	N36° E	橢円	縄文 - 前期土器、横刃型石器(硬)	縄文前期後葉
土坑8	F18	100 × - × 77	褐色土	N67° W	-	縄文 - 前期土器	縄文前期後葉
土坑9	D18	100 × - × 90	褐色土	-	-	縄文 - 前期土器、打製石斧(硬)・石核(黒)	縄文前期後葉
土坑10	C7	130 × - × 38	黑褐色土	N43° E	橢円?		
土坑11	C7	104 × 66 × 4	黑褐色土	N50° W	橢円	縄文土器	縄文
土坑12	C3	(130) × 120 × 47	褐色土	N60° E	橢円		
土坑13	B7	180 × - × 7(18)	黑褐色土	-	-	縄文 - 前期土器	縄文前期後葉
土坑14	E6	168 × 118 × 36	黑褐色土	N75° W	橢円		
土坑15	G3	126 × 118 × 41	黑褐色土	N20° W	橢円	縄文土器	縄文
土坑16	K7	100 × - × 29	黑褐色土	-	-		
土坑17	B6	- × - × 31	黑褐色土	-	-	縄文 - 中期土器	縄文中期中葉
土坑18	I3	48 × 40 × 16	黑褐色土	N34° W	不整橢円	縄文 - 前期土器	縄文前期後葉
土坑19	O5	160 × (80) × 36	褐色土	N58° E	橢円	灰釉陶器 - 筋、縱形石匙(赤チサート)	縄文前期後葉
土坑20	M5	- × - × 64	黑褐色土	-	-	横刃型石器(硬)	縄文
土坑21	P5	160 × - × 27	褐色土	-	-	尖頭器?(黒)	縄文草創期?
土坑22	Q8	234 × 160 × 102	黑褐色土	N70° W	橢円	打製石斧(硬)	縄文
土坑23	P11	200 × - × 28(52)	黑褐色土	N36° W	-		
土坑24	P12	- × - × 21(58)	黑褐色土	-	-		
土坑25	N21	- × 60 × 22	黑褐色土	N3° W	-		
土坑26	E11	90 × 70 × 20	褐色土	N55° E	橢円		
土坑27	B5	- × - × 38	黑褐色土	-	-		
土坑28	H7	- × 110 × 38	黑褐色土	N46° W	-		
土坑29	L7	- × - × 12	黑褐色土	-	-		
土坑30	P11	72 × - × 9	黑褐色土	-	-		
土坑31	K7	- × - × 32	黑褐色土	-	-		
土坑32	H6	180 × - × 16		N5° W	-		
溝址1	B20	- × 136 × 23	黑褐色土	N48° E	直線状		
		小 82 × 10					
溝址2	E20	324 × 126 × 78	上層-黑色 土、下層-黑 褐色土	N53° W	直線状	土-甕、縄-前期後葉・中期中葉土器、 横刃型石器(硬)・打製石器(縄)	
			褐色土			石礫(黒)	古墳時代
溝址3	E7	(280) × 148 × 39	黑褐色土	N37° E	直線状	土-?	古墳時代
		小 120 × 38					
溝址4	D6	470 × 134 × 48	黑褐色土	N62° W	直線状	土-?、打製石斧(硬)・ 磨製石斧(縄)	古墳時代
		小 100 × 19					
溝址5	G7	(1570) × 116 × 38	黑褐色土	N49° W	直線状	土-?、縄-前期後葉土器、 打製石斧(硬)・摩面をもつ石器(砂)	古墳時代
		小 82 × 21					
溝址6	K3	- × - × 61	黑褐色土	-	-	土-?、縄-前期後葉・ 中期中葉土器、横刃型石器(硬)	古墳時代
		小 - × 37					
溝址7	J6	670以上 × 310 × 48	黑褐色土	北N9° E	湾曲		
		小 - × 17		南N46° E			
溝址8	P9	- × 100 × 25	黑褐色土	N63° E	蛇行		
		小 90 × 19					
溝址9	O15	460 × 106 × 58	褐色土	N56° W	直線状	縄-前期他、火を受けた横刃型石器	
		小 106 × 37					
溝址10	N18	130以上 × 86 × 30	黑褐色土	N46° E	直線状		
		小 70 × 25					
溝址11	E16	140 × 28 × 12	黑褐色土	西N50° W	湾曲		
		小 22 × 9		東			
				N66° W			

第1表 遺構属性表

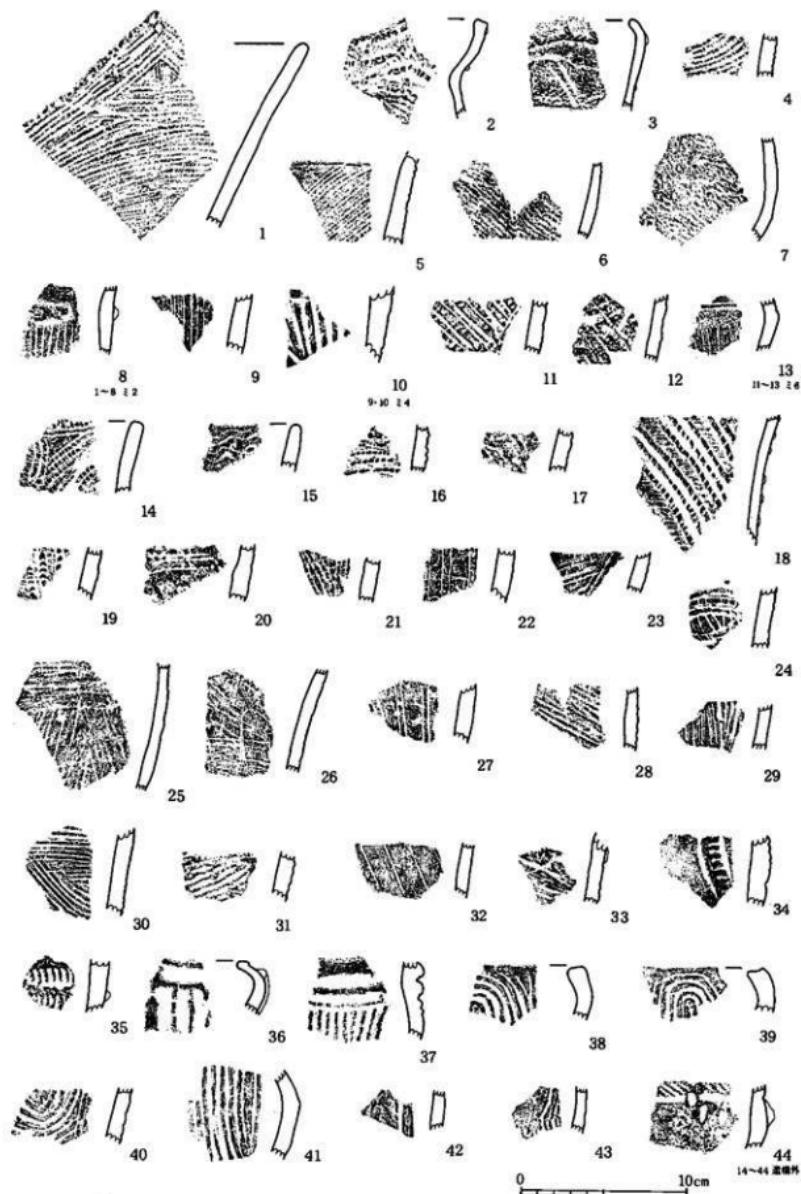
図 版



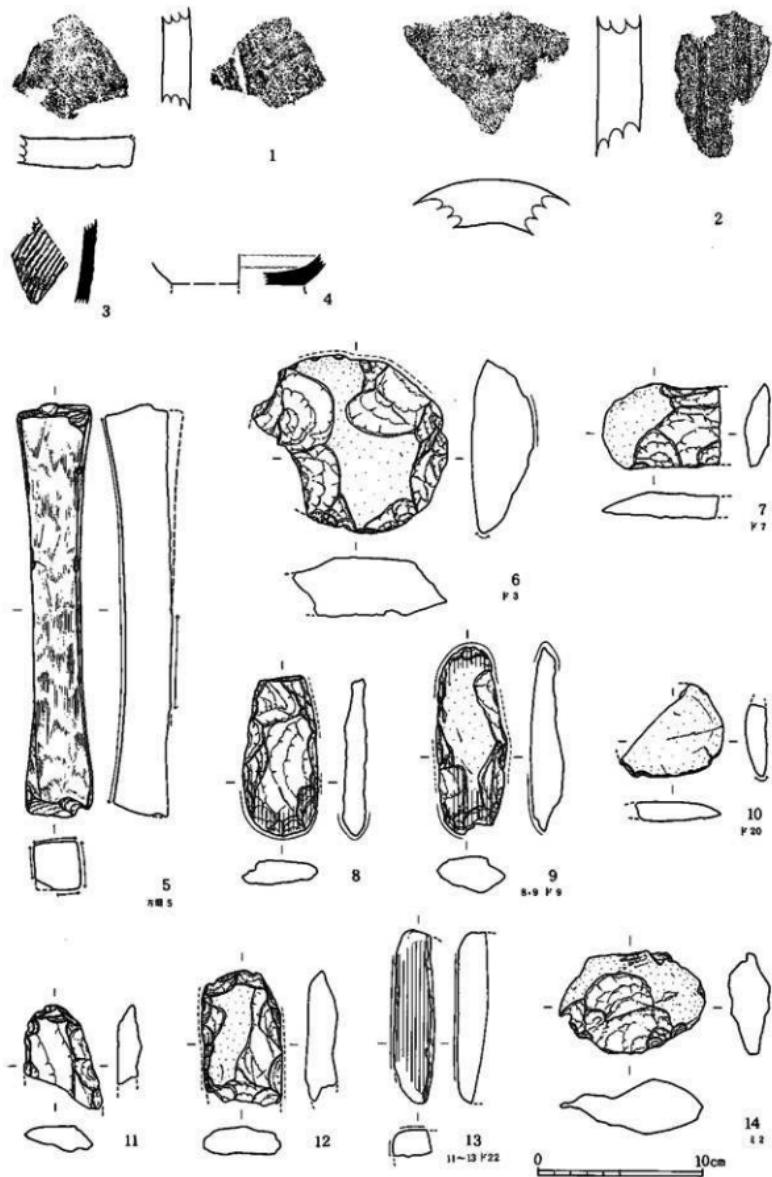
第1図 方形周溝墓5 土坑1・3・6~8



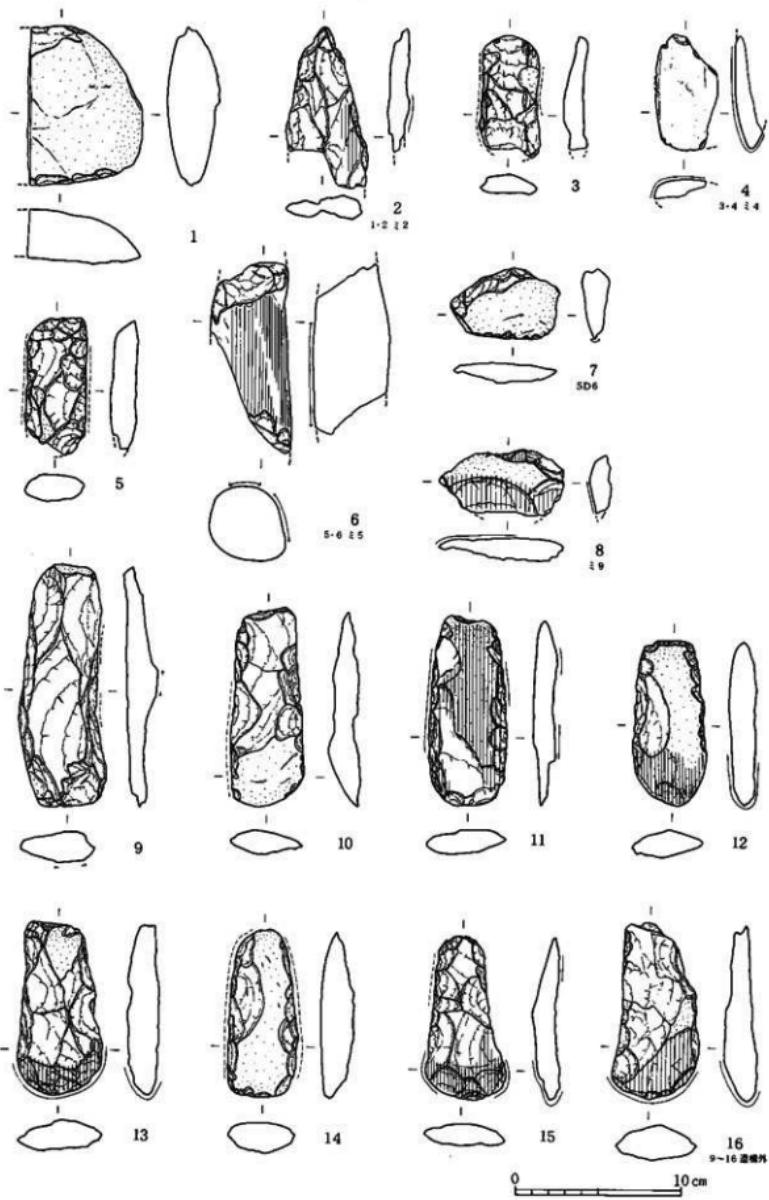
第2図 土坑9・11・16・19~22



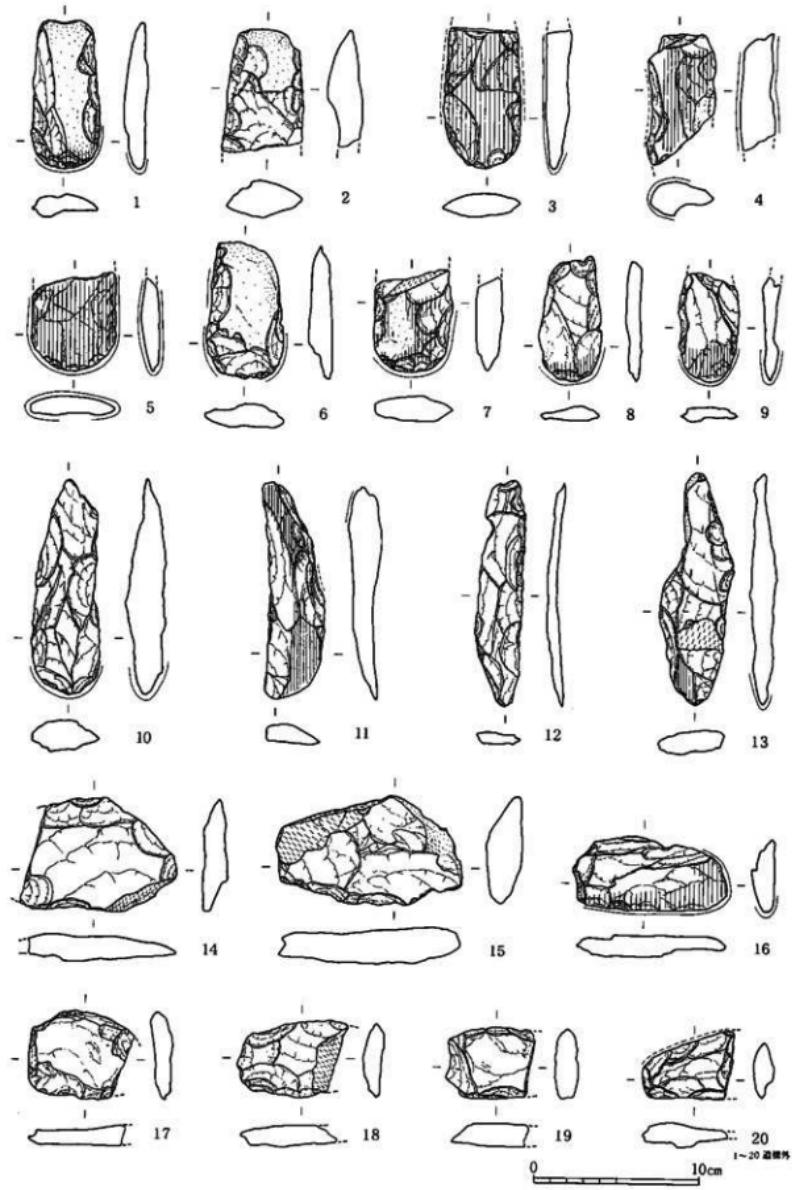
第3図 溝址2・4・6 遺構外出土遺物



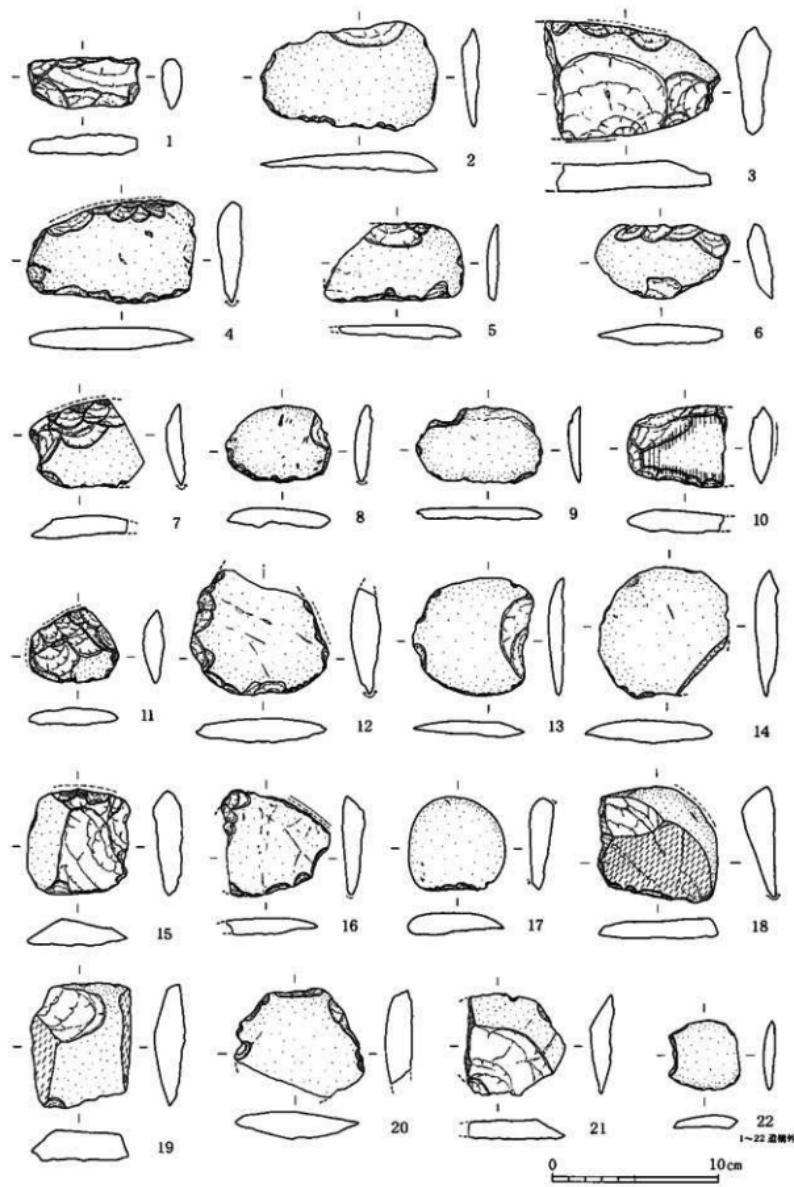
第4図 遺構外出土遺物、方形周溝墓5・土坑3・7・9・20・22、溝址2



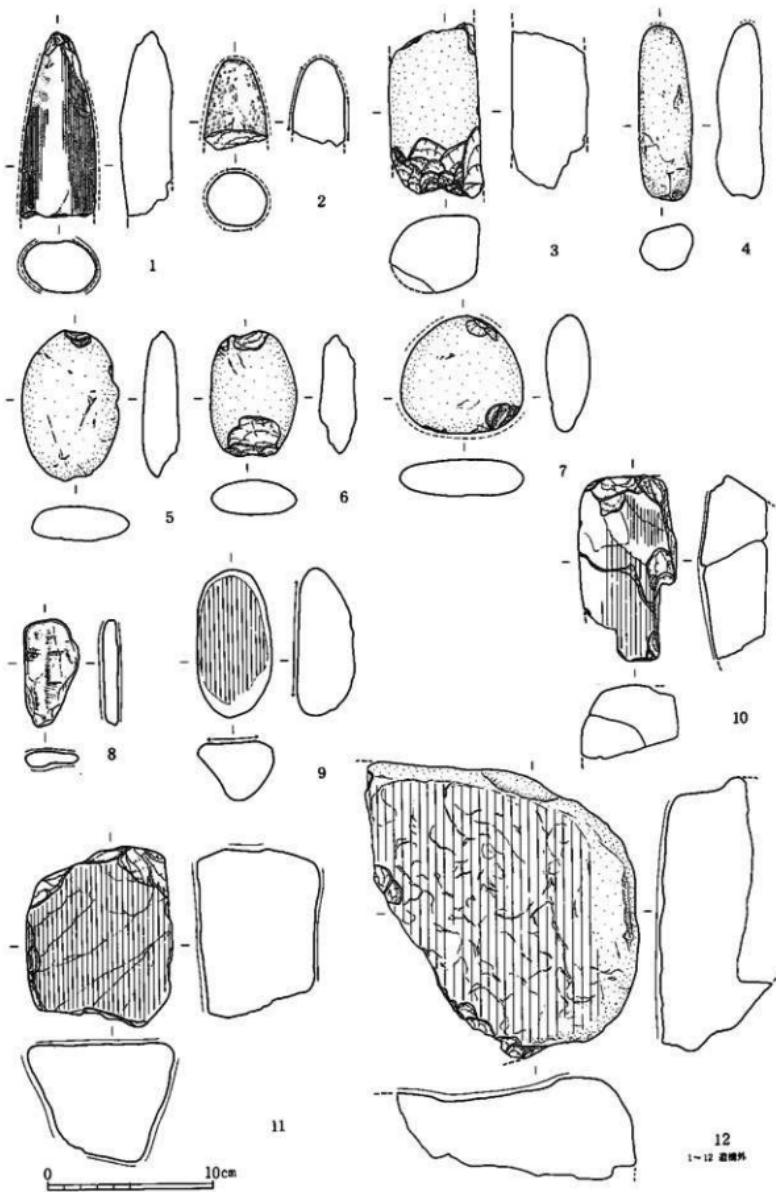
第5図 清址2・4~6・9、遺構外出土遺物



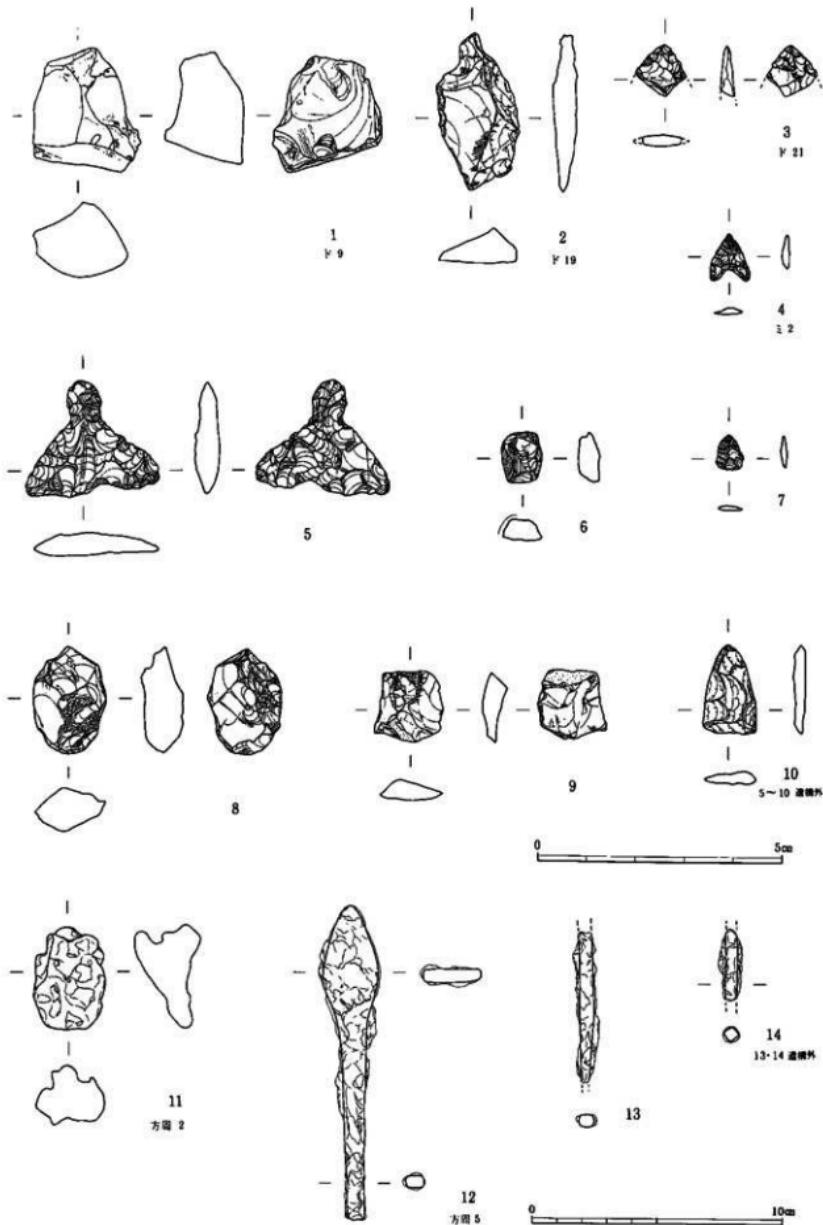
第6図 造構出土遺物



第7図 遺構外出土遺物



第8図 遺構外出土遺物



第9図 方形周溝墓2・5、土坑9・19・21、溝址2、遺構外出土遺物



調査区全景
(東から西を写す)



同上
(東半部)



方形周溝墓 1



方形周溝墓 2 他



方形周溝墓 5



方形周溝墓 5 碓検出状況



同断面

图版 4



土坑 2 · 3 · 7



土坑 15



沟址 3 · 5 、土坑 14



南西側トレンチ



南東側トレンチ



重機作業風景



遺構検出作業



遺構掘り下げ作業



方形周溝墓 5 瓦検出作業

報告書抄録

ふりがな	かみのぼういせき							
書名	上の坊遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬場保之							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL0265-53-4545							
発行年月日	平成14年8月日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
上の坊遺跡	飯田市上川路 310-1	市町村	遺跡番号	35° 27' 36"	137° 49' 00"	平成3年 8月5日 ~ 9月17日	507m ²	事務所兼 倉庫建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
上の坊遺跡	集落址 墓址	縄文時代 前期 中期 弥生時代 後期 古墳時代 中期 終末	方形周溝墓 竪穴 土坑 溝址・溝状址 小柱穴	5基 2基 32基 11条	縄文時代 土器 石器 弥生時代 石器 古墳時代 土師器 須恵器 砥石 鉄製品 布目瓦	縄文時代前期後葉の 集落址の一画が調査さ れた。 また、長野県史跡馬 背塚古墳の周囲に展開 する、古墳時代中期の 墳墓群の一画が調査さ れた。 さらに、布目瓦が出土して おり、寺院址等の存在が推定される。		

かみ の ぼう い せき
上 の 坊 遺 跡

平成14年8月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
長野県飯田市教育委員会
印 刷 龍共印刷株式会社
